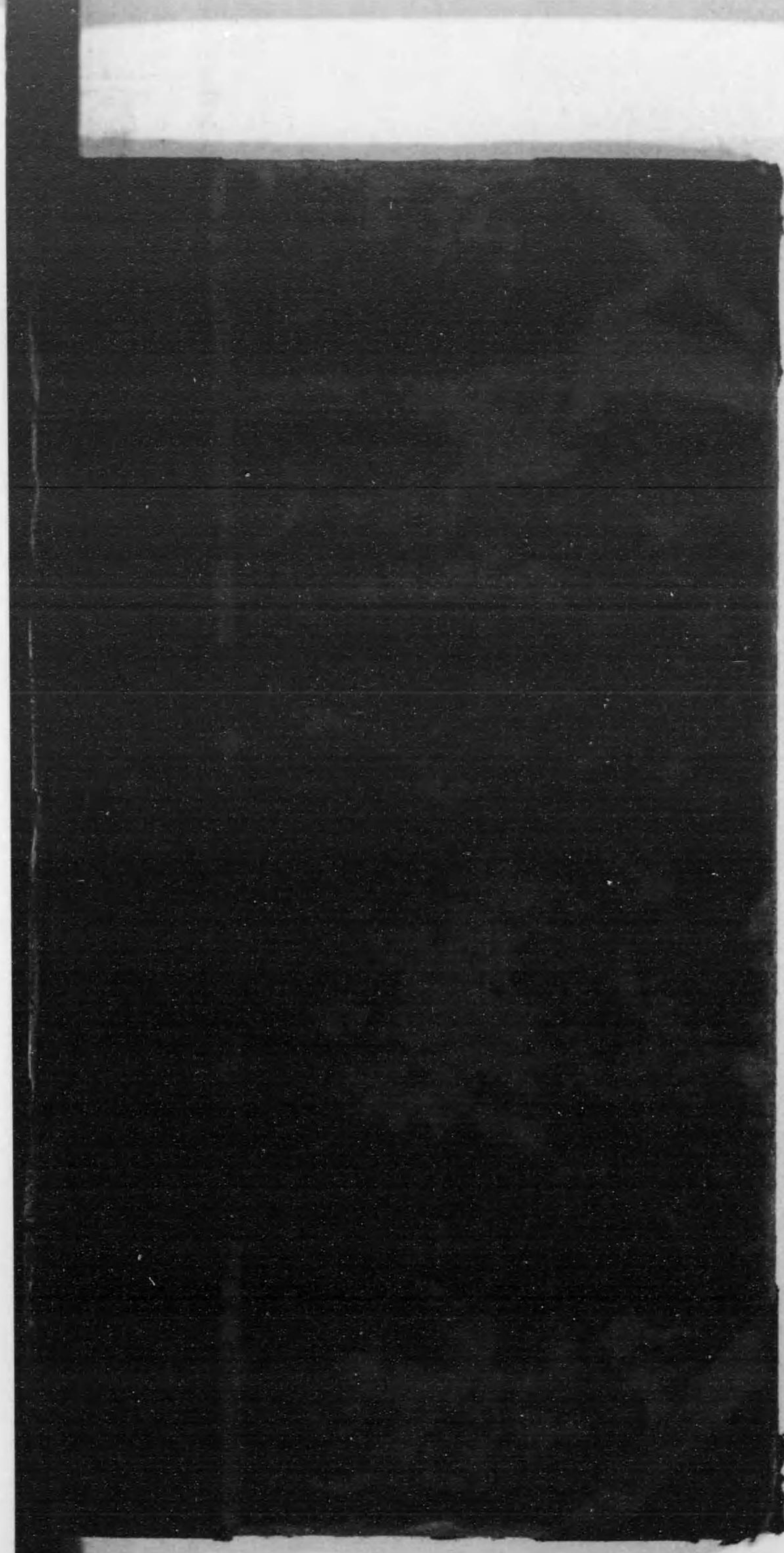


始

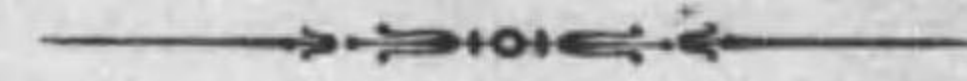


323

237

Common Mistakes in Translation

From Japanese into English

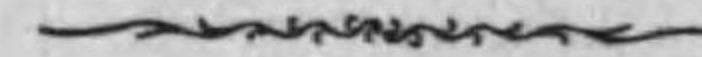


正譯 和文英譯普通の誤
對照



BY

K. MASAKI



THE
KEIBUNKWAN
TOKYO

323-237

**Common Mistakes in Translation
From Japanese into English**



正譯 和文英譯普通の誤
對照



BY
K. MASAKI

THE
KEIBUNKWAN



緒言

本書は余が既往十年間中等學校乃至高等
豫備校等に於て實地教授の結果より得たる一
の副産物に外ならず。試に中學四五年生又は^{而もいへば}
之より更に進んで高等諸學校に入らんとして
その應試の準備に忙しき程度の學生等に或る
種の和文英譯問題を課したりとせんか、固よ
り中には支離滅裂文更に體を成さず到底收拾
すべからざるが如きものあるも、之等は少數
の極めて劣等生の部類に屬し、その多くは文
中唯だ二三箇所添削を要するに止まり、しか
も甲の生徒の謬る所は亦乙の生徒の免れ難き
所、その誤謬は概ね共通的のものなり。茲に
於て余はその之等諸生徒の謬れる答案を注意
して蒐集し、更に審に之を比較對照してその
禍根を剔抉し以て從來余が實地教授の參考に
供し、尠からざる利便と實益とを得たり。

然るに余が親交ある敬文館主樫村氏一日余を城北の寓居に叩き談偶々此の事に及ぶや「それは實に學界の至寶にして學生絶好の伴侶たり、徒に之を君が秘囊に藏めて以て唯だ君が關係せる一部學校の生徒のみその惠澤に浴せしむべきに非ず、宜しく速に之を公刊して廣く天下の學生の爲めに圖るべきなり」と、慫慂止まざるものあり。余即ち意を決して之を剞劂に附し茲に本書を公にすることゝなりぬ。固より片々たる一小冊子敢て多く言ふに足らざるも、言はゞ學生諸君が先輩僚友の覆轍にして胸中自ら首肯するものあり、以て後車の覆へるを戒むるの一助ともならば望外の幸なり。

大正六年五月下浣

間崎勝義識す

和文英譯に於ける學生の通弊

- (1) 如何に複雑なる文でもその骨子は主語と述語とに在るから、凡そ一文を譯さうとする時には先づ第一に此の二つの者を捕へるが最も大切である。然るに學生の常としてその文の軀幹の何れに存するかを顧みず唯だ徒らに文の最初の語より逐字的に譯出せんと試ること。
- (2) 英語は之を日本語に比較すると餘程理論的、分解的に出來て居ると云ふことを念頭に置かずして、動もすれば矢張日本語の極めて“loose”なる語法その儘に英譯せんとする者あること。例へば日本語には必ずしも一々主語を附しないよりして英語に於ても矢張その筆法を用ひて往々之を落とすとあるが如き、又は「日本の氣候は滿州よりも溫和である」を、之は實は日本の氣候と滿州の氣候との比

較であつて決して日本の氣候と滿州そのものとの比較ではないと云ふことに氣が附かず、漫然 "The climate of Japan is milder than Manchuria." と譯するが如き。

(3) 若し原文の語句その儘を英語に移し得べくんばそれは蓋し英譯としては理想的のものであらう、けれども何分日本語と英語との如く根本に於て全く語系を異にせるものに在つては、斯の如きは言はゞ極めて少數の特別なる場合に於てのみ實行し得べきことであつて、普通の場合に於ては寧ろ原文の意味を傳ふるに努むべきものであらうと信ずる。然るに學生の多くは徒にその原文の字句に拘泥して却つてその眞意を傳ふるを得ざること。

(4) 斯く全く語系を異にせる國語の翻譯に當つては時に原文に無き語句を補ひ又は時に原文中或る種の語句は之を省略し英文としては

praise
prize

敢て之を譯出するの必要無きことあるを思はざること。

(5) 英語と日本語とには時として非常なる慣用上の差異あることを思はず、飽く迄も邦語と同一の表白法を用ひんとすること。

(6) 日本語の文法上の分類必ずしも英語に適用し得ざること考へずして、常に我を以て彼を推さんとすること。例へば「東京へ着く」「現場に近づく」「親に似る」「山に登る」など云ふ時、その「着く」「近づく」「似る」「登る」が日本語の文法で自動詞であるが爲め矢張その筆法を應用して "to reach to Tokyo," "to approach to the scene," "to resemble to one's parents," "to climb on a mountain" などし、以て之等の語が英語に於ては他動詞であつてその次には何等前置詞を要しないことを考へざること。

(7) 原文の語句を言はゞ直覺的に解して深くその真意を究めざる。例へば「……した」と言へば常に過去を、「……して居る」と言へば進行形を用ひ、「の」とあれば何時も“of”を、「……したが」とあれば如何なる場合にも“but”を用ひようとするが如き。

(8) 冠詞、名詞の數、動詞の時制 (Tense)、助動詞殊に“shall,” “will”、其の他前置詞等の用法に關し何等確乎たる自信あるに非ずして言はゞ出鱈目に之を用ふるが如き。

以上は學生諸君の通弊中の主要なるものを列擧したるに過ぎないけれど、以下順次説明せる〔正譯〕〔誤譯〕の各々に對し之を比較對照せられなば、必ずや諸君は成程此の問題を課せられたらば余も亦同一の誤を爲すと首肯せらるゝものが尠くあるまいと思ふ。

吾も亦、此の如き誤を犯す
諸君よ此、本、見、價、は、し、
信、子、呼、呼、對、照、
和文英譯普通の誤
見、お、け、は、あ、り、と、い、て、な、い、わ

(1) 僕は萬年筆を欲しいけれど、買ふ金が無い。

〔誤譯〕 I want a fountain-pen, but I have no money to buy it.

〔正譯〕 I want a fountain-pen, but I have no money to buy ~~it~~ (with).

〔解説〕 I cannot afford to buy one.

a. 「買ふ金が無い」は無論「それを買ふ金が無い」の事であるから一寸考へると“it”で何も差支へは無い様であるけれど、之は所謂學生普通の誤の一つである。即ちこの場合成程邦語では「それ」は云ふものゝ此處は實は更に“a fountain-pen”を今一回繰返すべきを、それでは餘りに工夫が無過ぎる故代名詞を用ひてその代りなさせようと思ふのである。然るにいくら邦文が「それ」と云つたからして“it”としては“it = the fountain-pen”でその萬年筆は何れの萬年筆なるか既に定まつてしまふことゝなつて事實に合はない。

比較:-

Have you a knife?	Yes, I have one (=a knife).
	No, I have none (=no knife).
Have you the knife?	Yes, I have it (=the knife).
	No, I have not it (=the knife).

尙之と同じ関係でいる場合の代名詞は場合によりて色々工夫を要することがある。

「金が御入用なら、御用立てしう。」 *I will*

If you need any money, I'll lend you some.

「眼鏡が入るなら、買ってやらう。」

If you need spectacles, I'll buy you a pair.

b. 「買ふ金が無い」は實は「その金で買ふ」のだから“with”があるが本式だけれど、之は省いても強ひて差支へは無い。

(2) 私はほんの少し英語を話すことが出来ま
す、若し良き教師を御存じなら御周旋を
願はれませうか。 (海經 44)

[誤譯] I can speak English only a little.
If you know a good teacher, can you
not help me to engage him?

[正譯] I can speak English only a little.
If you (happen to) know of any good
teacher of it, can you not help me (to)
engage one?

[解説]

次の差に注意:

I know the man.

「その人を知つて居る(その人を知り得た)。」

I know of the man.

「そんな人のあることを云ふことを知つて居る。」

ところで本文中の「……を御存じなら」は即ち「ま
う云ふ人のあることを御存じなら」の意であるから單
に“know”では不可である。

b. 單に「良き教師」とは云ふのもい“a good teacher”
だけでは何の教師だか不明である、矢張“a good tea-
cher of it (= English)”とする方が宜しい。

c. “Help”の後に Complement として用ひられたる
Infinitive にはよくかく“to”を省く。

[参考]:—

Help me (to) put away those books.

「其の本を片付けて助ける。」

尙本文は“help”などを省く單に“will you kindly get
me one”などするも亦一法である。

d. 最後の“engage him”は即ち“engage the good
teacher of it”で、その良教師は既に定まつて居るもの
なる、然るに此處は事實上無論その定まつて居る者
は無いから實は更に“a good teacher of it”と不定冠
詞を附したるものを今一回繰返す筈であるのを煩を厭
うて代名詞“one”を用ふる次第である(前問参照)。

(3) もう少し忍耐がなくては何事も成功せ
ぬ。 (海兵 大正 5)

[誤譯] Unless there is a little more per-
severance, you will not success in every-
thing.

〔誤譯〕 An ass sometimes calls an "usagi-uma," for its ears are long like a hare.

○〔正譯〕 An ass is sometimes called (an) "usagi-uma," for it has long ears like those of a hare.

〔解説〕

a. 原文の「……と謂ふ」は實は「……と謂はる」であるから〔正譯〕の如く Passive にするか、若しくは主語として "We," "they," "people" などを補ひ Active にして "We sometimes call an ass (an) "usagi-uma" まですべきである。

b. 「驢馬は耳が長い」は「驢馬の耳は長くある」とせずして、〔正譯〕の如く「驢馬は長き耳を持つ」と云ふ形にする方が英語の慣用である。

「あの人は鼻が低い。」

He has a flat nose.

○但し時としてはこの "have....." よりも "to be of..." の形を用いた方が更に一層 Idiomatic なることもある。

比較:-

{ 「此の子は氣象が烈しい。」
This boy has a hot temperament.
This boy is of a hot temperament.

比較:-

{ 「あの男は氣が短い (短氣だ)。」
He has a short temper.
He is of a short temper (=is short-tempered.

{ 「その女は色が白い。」
She has a fair complexion.
She is of a fair complexion.

○ c. 次に「兎の様に」は實は「兎の耳の様に」の畧であるから、少くとも "those of a hare" とする必要がある (前問参照)。

⑥ 彌次馬共は巡查の姿を見るとさながら蜘蛛の子を散らすが如く逃げ失せた。

〔誤譯〕 At the sight of the policemen, the busybodies scattered like spiders.

〔正譯〕 At the sight of the policemen, the busybodies scattered like so many spiders.

〔解説〕

「さながら蜘蛛の子を散らすが如く」はつまり彌次馬が百人居たら百匹の蜘蛛の子をさ云ふ心持でかく散らすは "like (or as) so many....."、量には "like (or as) so much....." の形を用ふ。

ワマツトイフ
蜘蛛の子

比較:-

The lamps shone like so many stars.
 「ランプがさながら (それだけの) 星の如く輝いた。」
 He looks upon it as so much labour lost.
 「それをばさながら (それだけの) 骨折損の如く考へて居る。」

(7) あなたがたの不注意なのには主人も細君も驚いた様です。(一高 39)

〔誤譯〕 The master and the mistress seem to have surprised at your carelessness.

〔正譯〕 (Both) master and mistress seem to have been surprised at your carelessness.

〔解説〕
 a. 「主人も細君も」は一の對句を見て冠詞を書く。同様に "master and servant" 「主従」、 "parent and child" 「親子」、 "man and wife" 「夫婦」、 "brother and sister" 「兄弟姉妹」、 "wife and children" 「妻子」、 "teacher and student" 「師弟」。
 b. "To surprise," "to astonish," "to please," "to disappoint," "to satisfy" などは「驚かす」「仰天する」「氣に入らず」「失望さす」「満足さす」を英語では自動詞であるから、之を邦語の「驚く」「仰天する」「氣に入る」「失望する」「満足する」など自動の意味に用ひ

ようさする時は通例 *Passive* にするか、然らずんば全く構造を變じて

Your carelessness seems to have surprised (both) master and mistress.

即ち「あなたがたの不注意なことは主人をも細君をも驚かした様です」の形にする。

比較:-

「彼等の大膽なものには驚く。」
 I am surprised at their audacity.
 Their audacity surprises me.

同様に

「その報を聞いて吾々は吃驚した。」
 We astonished at the news. (誤)
 We were astonished at the news. (正)

「僕は今度の下男は氣に入つた。」
 I pleased with my new seryant. (誤)
 I am pleased with my new servant. (正)

(8) 私は犬が雞(ヒヨコ)を啣へて走つて居るのを見たので、石を投げたら頭へ中つた。

〔誤譯〕 Seeing a dog to run with a chicken in his mouth, I threw a stone to him and hit his head.

[正譯] Seeing a dog run with a chicken in his mouth, I threw a stone at him and hit him on the head. (石を投げた)

[解説]

a. 前に "see," "hear," "feel" など知覚を表す動詞がある之が Complement としてその後に来る Infinitive には (Passive に非ざる限りは) 常に "to" を省くが文法の定則である。

比較:-

We saw a dog run after a hen.
「犬が雞を追掛けるのを見た。」
A dog was seen to run after a hen.

They heard the girl sing "kimiga-yo."
「その女の子が君が代を歌ふを聞いた。」
The girl was heard to sing "kimiga-yo."

We felt the house shake slightly.
「家が少し揺れるやうな氣持がした。」
The house was felt to shake slightly.

a. 「犬に骨を投げる」と「犬に石を投げる」とは同じ「投げる」でも「投げる」が違ふ、即ち前者は所謂「……に投げてやる」と單に方向を示し、後者は「……に投げつける」と狙ひ定むる心持がある、従つて前者には "to" を用ふれど後者には "at" を用ふ。

比較:-

I threw a bone to the dog.
I threw a stone at the dog.

He presented a petition to his master.
「主人に嘆願書を差出した。」(提出)
He presented a pistol at the traveller.
「旅人にピストルを向けた。」(狙撃)

b. 「彼の頭に當つた」など云ふ時 "hit his head" と云ふは英語の慣用法に適はぬ、英語では先づ大きく「誰に中つたか」即ち「彼に中つた」

hit him

と言つて置いて、それから然らば「(彼の)何處へ中つたか」即ち「その頭の所へ中つた」

on the head

と分解的に云ふが習慣である。同様に

To strike

To slap

To tap

To pat

To touch

To take

To catch

To hold

To seize

To shake

To pull

a person—on the head, cheek,
shoulder, back, etc.

a person—by the hand, sleeve,
button, hair, etc.

To cut }
 To wound } a person in the leg, arm, etc.
 To shoot }

To look }
 To stare } a person in the face.
 To gaze }

To shoot a person—to the heart,
 through the head, etc.

要するに「打つ」と云ふ意味の動詞には“on,”「捕まへる」と云ふ意味の動詞には“by,”「傷つける」「(顔を)見る」と云ふ意味の動詞には“in”なる前置詞をその局部を示す名詞の前に置き且つその名詞には常に定冠詞を附するが普通である。

X (9) 一昨夜神保町の或る古本屋で面白い本を見つけたから昨朝買ひに行きましたらもう賣り切れて居りました。(東高商 42)

〔誤譯〕 On the night before last I found an interesting book at a certain second-hand bookstore in Jimbo-chō, so I went there again on the morning of yesterday to buy it, but it was already sold.

〔正譯〕 *The night before last* I found an interesting book at a certain second-hand

book-store in Jimbo-chō, so I went there again yesterday morning to buy it, but it had already been sold.

〔解説〕

a. “The night before last” などの前には前置詞は不要。

b. 「昨朝」などは簡単に “yesterday morning” と謂ふ。

c. 「買ひに行つた」こゝが既に「昨朝」を過去であるのに、その時その本は既に賣り切れて居たと云ふからには當然 “had been sold” を Past Perfect を用ふべきである。

X (10) 貴君が停車場へ御着の時には汽車は早や出て仕舞つて居たさうですね、私も間に合ひませんでした。(大高工 43)

〔誤譯〕 I hear the train had already started when you reached to the station. I was not in time (for it) too.

〔正譯〕 I hear the train had already started when you *reached* the station. I was not in time (for it) *either*.

【解説】

a. "Reach" が「……へ着く」を云ふ意味の時は他動詞でその次に前置詞は不要、但し之は "got to," "arrived at" をするも可。

b. 「私も……せぬ」を否定の時の「も」には "not too" や "not also" の形は用ひずして "not either" 又は "neither" を用ふ。但し之は肯定に變じて "I missed it," "I lost it" などすれば矢張 "too" で宜しい。

(11) 父は二年前に死んだと彼は云うた。
(仙高工 41)

【誤譯】 He said that his father died two years ago.

【正譯】 (a) He said that his father had died two years before.
(b) He said, "My father died two years ago."

【解説】

(a) の形にするはその云つたことが既に過去であるのに父の死んだのはそれよりも更に二年前であるから當然 Past Perfect をすべきである、次に "ago" は單に今より溯りて「……前」の義で、(a) の如く既に

一の過去より更に溯りて「……前」を云ふ時は "before" を用ふ。

(12) 今朝僕は彼の⁷¹方⁷⁹を訪問したら昨日東京へ出立したと聞いて甚だ失望した。

(三高 41)

【誤譯】 I called on him this morning and was very disappointed to hear that he started Tokyo yesterday.

【正譯】 I called on him this morning and was (very) much disappointed to hear that he had started for Tokyo yesterday. (出来 11° 24°) (親父)

【解説】

a. "I am very tired." "He was very delighted (or pleased) to do so." など極めて少数の例外を除いては過去分詞には單獨に "very" は用ひず "much" を用ひ、"very" は現在分詞 (の形容詞として用ひられたるもの) に用ふ。

比較:-

{ I was much surprised at the news.
I heard a very surprising news.

4. 「訪問した」が既に "called on" を過去であつて、しかもその訪問した時には既に立出して不在であつた

と云ふからには「出立した」は是非 "had started" と Past Perfect にしなければならない。

d. 「……へ出立した」を "start," "depart," "leave," "set out" など云ふ動詞の後に在つて行先を示す前置詞は常に "for" であつて "to" ではない、だからかの電車の横には "for Kōbe" 「神戸行き」など "for" を用ひてあるのである。但し "go" なら無論その後には "to" でよいのである。

★ [13] 明日天気ならば学校の歸りに君の宅へ行くよ。(六高 41) *行くよ*

[誤譯] If it will be a fine weather to-morrow, I call on you on my way home of the school.

[正譯] If it ^{is} fine (weather) to-morrow, I will call on you on my way home from school.

[解説]

a. 「明日天気ならば」は成程未來のことではあるけれど、さればさてかく "if," "when," "before," "after," "till" などの接續詞に伴ふ時を表す副詞句 (Adverbial Clause) の中に在つては矢張 Present を以て Future に代用す。

比較:—

I don't know when he will come. (名詞句)
「何時来るか知らない」。

I will let you know when he comes. (副詞句)
「来たら御知らせしよう」。

b. "Weather" と云ふ語は "The weather is fine to-day." の如く形容詞を伴はざる時は常に定冠詞を附するも、"fine weather," "bad weather" など形容詞を加ふる時は一切冠詞を附せず。

c. 之に反し「君の宅へ行くよ」は形こそ現在なれ、事は未來に関する約束を表はすを以て "I will call on you" とすべきである、尤も之は「行く都合になつて居る」の心持にして "I shall" を用ふるも敢て差支は無い。

d. 「学校の歸り」は即ち「学校からの歸り」であるから前置詞は無論 "from" たるべく、又かある場合の "school" には "to go to school," "at school" など云ふ時と同じく冠詞を省く。

[14] 明日午後參上致したいのですが御在宅ですか。(四高 41) *tomorrow*

[誤譯] I like to call on you in the afternoon of to-morrow. Will you be at home?

〔正譯〕 I should like to call on you to-morrow afternoon. Shall you be at home?

〔解説〕

a. “I like” は單に好き嫌ひの「好き」で、「……したい」と云ふ時は “I should like” 又は “I wish,” “I want” などいすべきである。

b. 「明日午後」を “in the afternoon of to-morrow” とするは不可である、尤も「十日の午後」など云ふ時は “in the afternoon on the tenth,” “on the afternoon of the tenth” とは云ふけれど、「明日の午後」「昨日の朝」など云ふ場合には簡單に “to-morrow afternoon,” “yesterday morning” と云ふ。但し “in the afternoon on the tenth” に準じて “in the afternoon, to-morrow” とするは敢て差支へ無い。

c. 「御在宅ですか」を “Will you be at home?” とするは誤である、成程 “you will” は單純なる未來を表すけれど、さればさて之が疑問の形なる “Will you?” は最早單純なる未來ではなくして「……して下さらぬか」と先方に相談、約束等を爲すことになり、單純なる未來には “Shall you?” の形を用ふ。要するに “Will you” は “I will” に相當して先方の意向を尋ね、 “Shall you?” は “I shall” に相當して單純なる未來を表すと思ふべきである。

〔15〕 私は亡父が二十五歳の時に生まれました、彼が若し生きて居れば本年六十五歳で御座います。(商船 41)

〔誤譯〕 I born when my father was twenty-five years old, and if he is living now, he will be sixty-five this year.

〔正譯〕 I was born when my father was twenty-five years old, and if he were living now, he would be sixty-five this year.

〔解説〕

a. 「生れた」は邦語でも矢張「(親に) 生れた」と一の *Passive* であるから當然 “was born” とすべきである。

b. 「二十五」「六十五」など云ふ數字はその十位の數と一位の數との間に *hyphen* を要す、然らずんば順序を顛倒して “and” を用ひ “five and twenty,” “five and sixty” などいしなければならない。

c. 今生きて居ない人を「若し生きて居れば」と云ふは即ち現在の事實に反する假定であるから “if he

were living” と附屬法過去 (Subjunctive Past) を用ひ、之に對し後の結果の句も亦 “would be” と可能法過去 (Potential Past) にすべきである。

(16) 病氣でなかつたら、君と一緒に奈良へ行つたのに。(神高商 41)

[誤譯] If I were not ill, I would go to Nara with you.

[正譯] If I had not been ill, I would have gone to Nara with you.

[解説]

原文はその時實際は病氣であつたものを「病氣でなかつたら」と假定し、つまり過去の事實に反する假定を表すから當然 “had not been ill” と附屬法過去完了 (Subjunctive Past Perfect) を用ふべく、それと同時に之に對應する結果の句も亦 “would have gone” と可能法過去完了 (Potential Past Perfect) にすべきである。

(17) 支那語と露西亞語と何れが六つかしいか。(海機 37)

[誤譯] Which of Chinese and Russian is difficult?

[正譯] Which is (the) more difficult, Chinese or Russian?

[解説]

a. 「A と B と孰れが……」を云ふ時はかく “Which …… A or B?” の形にするが英語の習慣である。

b. 「支那語と露西亞語と何れ」と云ふ以上は或は支那語よりも露西亞語が、又は露西亞語よりも支那語が六つかしいと云ふ風に何れか多く六つかしかるべき答であるから常に比較級にし、且つかく二者の中多く六つかしきものは自ら一つしか無かるべきを以てかいる場合には之に定冠詞を附するが原則である。(但し “more” の附いて居る場合には往々之を省くこともあるけれど)。

(18) 三浦半島で高い山は大楠山と武山と聞きましたか、何ちらが高いのですか。(海機 35)

[誤譯] I heard that the highest mountains in the Peninsula of Miura are Mt. Ōkusu and Take. Which is high?

[正譯] I have heard that the highest mountains in the Peninsula of Miura are Mt. Ōkusu and Take. Which is the higher (of the two)?

〔解説〕

a. "I heard" では単に「何時か聞いた」と云ふだけで今は忘れて居るかも知れないから此處には少々當らない。

b. "The higher (of the two)" に就ては前問参照。

✓ (19) 太陽と月とは孰れが澤山地球に光線を與へますか。(東高師 35)

〔誤譯〕 Which of the sun and moon gives much light to the earth?

〔正譯〕 Which gives *more light* to the earth, *the sun or the moon?*

〔解説〕

訂正の理由は (17) (18) に同じ。

✓ (20) 夏の極熱い日に君は山と海岸と何れに行きたいですか。(北大農 42)

〔誤譯〕 On a very hot day of summer, which of the mountain and the seaside do you like to go?

〔正譯〕 On a very hot day of (or in) summer, which do you like *better* to go to, *the mountains or the seaside?*

〔解説〕

a. 全體の構文上の誤に就ては前三問参照。

○ b. 「何れに行きたいか」であるからその「に」に相當する "to" が必要。

○ c. 「山間」「山中」の意味の "mountain" は通例かく複數にして定冠詞を附す。

(21) 私は昨日買った杖を失ひました。

(東高 38)

〔誤譯〕 I lost the cane which I bought yesterday.

〔正譯〕 I *have lost* the cane (which) I bought yesterday.

〔解説〕

此處は「失ひました」と云ふと同時にその半面には「だからしてそれは今無い」の意味を含んで居るから "have lost" を Present Perfect にしなければならない。單に "lost" を Past にしたでは一旦は失つたが今は或は更にそれを見出して居るかも知らないのである。かく單に「何々した」とのみ云ひてそのかくしたる時日、場所、方法などを示さざる時は(その一面には常に「だからして今はかくかくなつて居る」と現在の状態を示し) 通例常に Present Perfect を用ふ。

✓ (22) 下田歌子女史の辭職に就て如何思ひますか。(廣高師 41)

[誤譯] How do you think of the resignation of Madame Shimoda?

[正譯] *What* do you think of the resignation of Madame Shimoda?

[解説]

○ かいの場合の「如何」は即ち「何ぞ思ひますか」「御意見は如何ですか (*What is your opinion of.....?*)」であるから “*how*” は不可である。

比較:-

△ 「世間の人々は彼のこゝを如何云ふか」
How do people speak of him?
What do people say of him?

✓ (23) あの人は目の療治をしに米國へ歸りました。(神高商 37)

[誤譯] He has returned to America to treat eyes.

[正譯] He has returned to America *to get (or have) his eyes treated.*

[解説]

a. 「目の療治をしに」は實は「目の療治をして貰ひに」であるから “*to treat.....*” では不可である、之では全然その人が眼科醫になつてしまふ。一體邦語ではかく實は「.....して貰ふ」「.....させる」「.....せられる」を云ふ所をも形のみは猶單に「.....する」と云ふことが多いから之を英譯する時には深く此の點に注意するを要する。

[類例]

✓ 「彼は 髪を刈りに 行くと言つて出て行つた。」
 (海兵 41)
 He went out, saying that he was going to cut his hair. (誤)
 He went out, saying that he was going to *get (or have) his hair cut.* (正)

✓ 「僕は此の前の日曜に寫眞を撮つた。」
 I took my photograph last Sunday. (誤)
 I *got (or had) my photograph taken* last Sunday. (正)

✓ 「僕は靴が破れた、一足 新調し なければならぬ。」
 My shoes are worn out, and I must make a pair. (誤)
 My shoes are worn out and I must *get (or have) a pair made.* (正)

(24) 人の思想感情は言語を以て表します。
(海經 42)

[誤譯] Men's thoughts and feelings express with words.

[正譯] Men's thoughts and feelings are expressed by means of (or in) words.

[解説]

a. 此處の「表します」は實は「表されます」であるから“are expressed”を *Passive* にすべきである。但し本文は「人はその思想感情を言語を以て表します」を矢張 *Active* の形にし

Men (or We) express their (or our) thoughts and feelings.....

とすることも出来る。

b. 「言語を以て」の「以て」に“with”は不可である。“With”は

He killed her with a sword.

「男は刀を以て女を殺した」。

の如くその動作を爲すに用ひし道具を示し此處には當らない。此處は是非作例の如く手段の意に解して“by means of”とするか又は思想發表の形式の心持で“in”をすべきである。

(25) 彼は丁度通りかゝつた貴婦人と犬とを撮影しました。(大高醫 42)

[誤譯] He photographed the lady and her dog which were just passing by.

[正譯] He photographed the lady and her dog that were just passing by.

[解説]

○ “The lady”に對しては“who,” “her dog”に對しては“which”を要す、そこでかく先行詞が人と物と異なる種類のものである時は之を受くる關係代名詞はその中間を取つて“that”とする。

(26) 昨年私は獨逸語か佛蘭西語を學ぶ積りであつたけれども、兩方とも出来なかつた。(高等 38)

[誤譯] I intended to study the German or the French in last year, but I could not both.

[正譯] I intended to study (either) German or French last year, but I could not study either (or I could study neither).

[解説]

a. 國語の名には、例へば“Chrysanthemum is the English for the Japanese “kiku.” [Chrysanthemum は日本語の菊に對する英語である]の如く特別の語を

指す時の外冠詞は不要、但し後に "language" なる語を添へるに "the German language," "the French language," "the English language" など、常に定冠詞を附す。

b. "Last year," "last week," "last night," "the day before yesterday," "the day after to-morrow" などの前には何等前置詞を要しない。

c. 單に "could not" をしてしかも後に "both" など Object を取ることは出来ない、[正譯]の如くするか、又は "could not do so" をでもするか、さもなれば全後に語を附せず唯だ "but I could not" だけで止むべきである。

[参考]

Do you study English?

{	Yes, I study.	(誤)
	Yes, I study it.	} (正)
	Yes, I do.	

{	No, I do not study.	(誤)
	No, I do not study it.	} (正)
	No, I do not.	

d. "Not.....both" は「兩方共には.....せぬ (唯片方だけ.....した)」を半分打消すことになる、兩方共打消さうと思へば作例の如く "not.....either" 又は ".....neither" を用ふべきである。

Japanese Study

同様に

I do not know all of them.

「皆は知らぬ (知つて居る者もあるが知らぬ者もある)」。

I do not know any of them (=I know none of them).

「皆知らぬ (誰も知つて居る者が無い)」。

(27) 君は松島へ行く道を知つて居ますか。

(二高 33)

[誤譯] Are you knowing the road to Matsushima?

[正譯] Do you know the road ^{lead} to Matsushima?

[解説]

「.....して居ます」をあれはさて何時でも之を進行形 (Progressive Form) に譯すればよいなど、思うては大變な誤である。「彼は(今)手紙を書いて居ます」などの如く單に一時的の動作を示す場合には、それは無論

He is writing a letter (now).

でもいけれど、若しそれが「知つて居ます」「持つて居ます」「似て居ます」などの如く自ら長く續くべき性質を帯びて居る意味の動詞には決して進行形は用ひないので常に單に普通の現在を用ふるのである。つ

まり今手紙を書いて居ても、それは今暫くすれば最早書かなくなるであらうけれど、知つて居るなど云ふことは知つたり忘れたりさうさう始終變化するものではないから。

尙一例を擧げて之を説明せん、今

- (a) A man is standing on the hill.
「あの山の上に人が一人 立つて居る」。
- (b) A monument stands on the hill.
「あの山の上に記念碑が 立つて居る」。

なる二文に於て、邦文の形は等しく「立つて居る」なるに一は進行形の現在を用ひ、他は單に普通の現在を用ひたるは一體何故であるか云ふに、(a)に在つてはその人は今こそ其處に立つて居るけれど今暫くすれば最早其處には立つて居なくなるだらうし要するに全く單に一時の動作を示したものに過ぎないけれど、(b)に在つては記念碑云ふ以上は自ら何時までも其處に立つて居るべき性質のものであるからである。

✓ (28) 日本人は極めて戦を好む民なりと歐洲人は思つて居る。(海經 42)

〔誤譯〕 Europeans are thinking that the Japanese are a very warlike people.

〔正譯〕 Europeans think that the Japanese are a very warlike people.

〔解説〕

正誤の理由は前問に同じ。

(29) 私はあの方をよく存じて居ります、あの方は此街の右側なる薬師堂の後の家に住んで居られます。(海經 42)

〔誤譯〕 I am knowing him very well. He is living in the house behind of Yakushi-dō on the right-hand side of this street.

〔正譯〕 I know him very well. He lives in the house behind the Yakushi-dō Temple on the right-hand side of this street.

〔解説〕

a. "I know" とするに就ては(27)参照、尙「住む」云ふ動作も自ら継続的性質を帯び浮草ならいざ知らず普通の人間は今日は東京明日は神戸と住所はさうさう變化するものではないから、例令形は「住んで居る」となつて居ても「住む」の意味には "is living" は通例用ひない、"is living" は例へば

Is he still living? No. he is dead.

「まだ生きて居るか。イヤ、死んだ」。

と普通生死に關してのみ用ふ。

b. "Behind" は之れ丈けで「……の後(の)」の意味

であるから、その後に更に“of”は不要、但し之は「……の裏の」の意味に取り“in front of”の反対なる“at the back of”（英國流），“in the rear of”（米國流）とするも可。

c. 「薬師堂」など神社佛閣の名は固有名詞なれど定冠詞を附するが文法の定則。それから「薬師堂」の「堂」が實は“temple”の意なれど日本語に通じぬ外人には中々そんなことは分らぬ故矢張かく“the Yakushi-dō Temple”とするが親切な言ひ方である、同様に「本願寺」は“the Hongan-ji Temple,” 「有珠岳」は“Mt. Usudake.”

√ (30) 本年の第一高等學校入學試験は七月五日より始めり。(一高 32)

〔誤譯〕 The First High School entrance examination of this year began from the fifth day of July.

〔正譯〕 The First High School entrance examination began on the fifth (day) of July this year.

〔解説〕

a. 「本年の」を原文に拘泥して矢張“of this year”と形容詞句にするは宜しくない、須く作例の如く副詞句にすべきである。但しこの“this year”は必ず

Heifirst

しも最後に置くを要しない、文の一番最初に置くも宜しく又は動詞“began”の後或は前に置いても敢て差支へない。

〔類例〕

〔君は先日の校友会に出席したか。〕

~~Were you present at the school-fellows' meeting the other day?~~

“Of the other day”と言つてないことに注意。

b. 「第一高等學校入學試験」は即ち「第一高等學校（へ）の入學試験」であるから本式に書けば“the entrance examination into the First High School”である、此の場合“into”の代りに“of”を用ふる者もあるけれど正確さは言ひ難い、但し作例の如く約めて言はば原文通りに單に“the First High School entrance examination”とすれば無論前置詞の問題は起らない。

c. 「……より始めり」を“began from……”とするは普通の誤であるが、“begin”や“commence”の後には“from”は用ひない、「……より」「……から」と言つたこと矢張「何日に始まつた」「何時に始まつた」の心持で、日には“on”時間には“at”を用ふべきである。

(31) 彼の人には此事に就て眞面目なのか知らん。(長高商 大正 2)

〔誤譯〕 I don't know if he is in earnest about the matter.

〔正譯〕 I wonder if he is in earnest about the matter.

〔解説〕

この場合の「知らん」は「驚き保む」即ち「訝る」の意であるから "I don't know" では當らない。

(32) 彼はどの汽車で此處を出立するのかわらん。(海兵 41)

〔誤譯〕 I don't know by which train will he start here.

〔正譯〕 I wonder by which train he will start from here.

〔解説〕

a. "I wonder" に就ては前問参照。尙文中 "by" は最後即ち "here" の次に廻すも宜しく。

〔類例〕

{ 「君はどの部屋に眠るか」。
In which room do you sleep?
Which room do you sleep in?

又は語の配置を全然變じて *from here*
By which train will he start... I wonder.
とするも可。

○ a. 「.....を出立する」と云ふ場合 "start" を用ふるに此の語は自動詞であるからその次に "from" を要する。若し "from" を用ひまいとすれば "leave here" と他動詞の "leave" を用ひなければならぬ。

(33) 此の壹圓札を五十錢銀貨二個と取換へて呉れ。(陸經 大正 5)

〔誤譯〕 Please change this one-yen note with two fifty-sen silver coins.

〔正譯〕 Please change this one-yen note for two fifty-sen silver coins.

〔解説〕

○ 「A を B と交換する」と云ふ時の「と」には常に "for" を用ふ、但し此處は「五十錢銀貨二枚に變へる」の心持にし結果を表す "into" を用ひて "into two fifty-sen silver coins" とすることも出来よう。

(34) 此の本は大層面白さうです、何うか二三日貸して下さいませんか。

(海機 大正 5)

〔誤譯〕 This book seems to be very interesting. Won't you kindly lend me it for a few days?

〔正譯〕 This book seems to be very interesting. *Will you* kindly lend *it (to) me* for a few days?

〔解説〕

a 誘引の意味の「……ませんか」には邦語と同じく矢張 "*Won't you?*" を否定の形を用ふるけれど、同じく「……ませんか」でも「……して下さいませんか」と依頼の意味の時は決して "*Won't you?*" の形は用ひない、常に "*Will you?*" (又は一層丁寧に云ふ時には "*Would you?*") の形を用ふることに注意。

b 「貸して下さいませんか」は即ち「私にそれを貸して下さいませんか」であるが、本来ならば「誰に何を……する」と云ふ時は、例へば

I gave him the book.

と云ふ風に「誰に」と文法上所謂 間接客語 (*Indirect Object*) は先に置き「何を」と直接客語 (*Direct Object*) は後に置くも、若しその双方が代名詞なる時は

I gave it (to) him.

と云ふに風にその順序を顛倒する。

✓(35) 前週の今日君と共に釣せしは此處にてはあらざりしや。(水講 44)

〔誤譯〕 Was it not this place that I fished with hook and line with you on this day of last week?

〔正譯〕 Was it not *in this place* that I fished (with hook and line) with you *this day week*?

〔解説〕

- a. 「此處にて」は即ち「此處に於て」であるからかく "*in*" を要す、但し之は單に "*here*" とすればそれは無論 "*in*" も何も入らない。
- b. 「前週の今日」など云ふ時には作例の如く簡単に "*this day week*" なる慣用句がある。但し之は場合によつては「來週の今日」の意味にもなる。

He will leave here *this day week*.

「彼は來週の今日此處を立つ」。

〔類例〕

This day year 「去年(又は來年)の今日」; *this night year* 「去年(又は來年)の今夜」; *this day month* 「先月(又は來月)の今日」; *this time to-morrow* 「明日の此頃」。

(36) 何方の道を行つても停車場の前に出ます。(海兵 大正 5)

〔誤譯〕 Whichever road you may go, you come out in front of the station.

〔正譯〕 Whichever road you may *take*, you will find yourself in front of the station.

〔解説〕

a. 原文には「行つても」とあれど實は「何れの道を取つて行つても」と取捨選擇の意味であるから、こんな場合には“take”を用ふ。

b. 「出ます」とあるも「何時か自然に其處へ来て居る」の心持で“find yourself”を用ひ、且前の「何方の道を行つても」の中に含まれたる條件に對し原文の「出ます」とあるに拘はらず此の句は矢張“will……”の形にするがよい。

〔附言〕

尙本文は簡単に

Either road will lead you to the station.

とすることも出来よう。

(37) 今度の歐洲に於ける戦争は何時頃終ると考へますか。確な答は出来ません。

(桐染 大正 5)

〔誤譯〕 Do you think about when will the war in Europe at present finish?

I cannot make a definite answer.

〔正譯〕 When do you think the present war in Europe will come to an end?

I cannot give you a definite answer.

〔解説〕

a. 「何時頃」だからさて何も必ずしも“About when”とする必要は無い。

b. “Do you think,” “do you suppose,” “do you imagine” など云ふ句は常に疑問詞の後即ち文中に挿むことに注意。

比較:—

{ Do you know who he is?
Who do you think he is?

c. 「今度の歐洲に於ける戦争」は“the war (which is) raging in Europe at present” 「目下歐洲で酷なる戦争」とでもすれば兎も角、さもなくば作例の如くするか又は單に“the present European war”とでもするが宜い。

d. 純然たる疑問文でなく“do you think”や“do you know”などに伴ふ所謂 附屬疑問句 (Dependent

Interrogative Clause) の中に在つては主語と動詞との順序は別に顛倒しはしない。

比較:-

Who is he?
Do you know who he is?
I do not know who he is?

What does he want?
I will ask him what he wants.

e. "Finish" は「終へる」と他動詞で且主として「確定の仕事を終へる」ことに用ひ此處には無論不可である、戦争などの「終る」ことには多くこの "to come to an end" を用ふ。

f. 成程 "to make answer," "to make a reply" とは云ふけれど「確答する」と云ふ時は通例 "to give one a definite answer" 即ち「誰某に確答を與へる」と云ふ形を用ふる。

(38) 此戦争は何時まで続くか誰にも想像がつかぬ。(北農工專 大正5)

[誤譯] No one can imagine till when will the present war last.

[正譯] No one can predict (or foretell) how long the present war will last.

[解説]

- a. この「想像がつく」は未來を「豫想する」の意味であるから現在假空の事實を想像するの義なる "imagine" は當らない。
- b. 「何時まで」と時間を表すには "How long?" 「何處まで」と距離を表すには "How far?" を用ふることに注意。
- c. "How long the present war....." と主語と動詞とが普通の順序を取るに就ては前問参照。

(39) 彼處に碇泊して居る船の名は何といひますか。

あれは扶桑です、我海軍で最も大なる戦艦です。(海機 大正5)

[誤譯] What is the name of the ship which is casting anchor there?

It is Fusō and is the biggest battleship of our navy.

[正譯] What is the name of the ship (which is) lying (or riding) at anchor over there?

It (or She) is the Fusō, the biggest battleship of our navy.

[解説]

- a. "To cast anchor" は即ち「投錨する」で "to weigh anchor" 「拔錨する」に相對し一時の動作を

表し、「碇泊して居る」を云ふ状態を示すには不可である。

b. 英語では高い所ならば "There is a bird's nest up in the tree." 低い所ならば "down in the pond" を云ふ風に先づ大きく "up" 又は "down" を大體の見當を示して置いて、それからその局處を述ぶるが習慣で、突然 "in the tree" とか "in the pond" とかは普通言はない。

之と同じ道理で「(アレ)彼處に」を現在向ふを指して云ふ時も單に "there" のみは言はずして "over there" を言ふ。

c. 戦艦の名には常に定冠詞を附するは英文法の定則。

d. 「我海軍で……です」は作例の如く前の "the ship" を同格 (Apposition) にする方が簡明で宜しい。

(40) お前は親の意に背いてそんなことはすべきものではなかつた、子たるものは親の命には従ふべきものである。

〔誤譯〕 You should not do so contrary to your parents' wishes; children should obey to their parents' commands.

〔正譯〕 You should not have done so contrary to your parents' wishes; children should obey their parents.

〔解説〕

a. 「すべきものでなかつた」は既にしたことに對する非難であるから "should not do" では不可である、之では單に「すべきものでない」を現在乃至將來のことになつてしまふ。

比較：—

You should have said it.
「云はなかつたのが悪い」。
You should not have said it.
「さう云つたのが悪い」。

b. 邦語では「……の命に従ふ」を「に」を要するけれど英語では "obey" は他動詞でその次に何も前置詞は要らない、それから「……の命に従ふ」が軽く單に「……の言ふことをきく」位の意味の時は強ひて "commands" など附する必要は無い。即ち

He obeys his elders.
「目上の者の云ふことをきく」。
He disobeys his elders.
「目上の者の云ふことをきかぬ」。

(41) 僕はそれをば彼かと思つたが詮議して見たら彼の兄弟であつた。

[誤譯] I thought it to be he, but on enquiry, I found it to be his brother.

[正譯] I thought it to be him, but on enquiry, I found it to be his brother.

[解説]

“He” を何故に “him” とすべきかと云ふに、かかる場合の「彼」は「(それを誰と思つたか) 彼と思つた」と文法上所謂補足語 (Complement) でしかも “it” なる客語の補足語 (Objective Complement) である。だからしてその格 (Case) は矢張その客語と同じく目的格で “him” となるべき筈である。

比較:-

{ I thought, it to be him. (客語の補足語)
I thought that it was he. (主語の補足語)

(42) 日本人で一番先きに洋行した人は誰と誰とであるか。

[誤譯] Who are the Japanese that went to abroad first?

[正譯] Who were the first Japanese { that
went } to
go } abroad?

[解説]

a. 邦語では「誰と誰とである」と現在に言つてあるけれど、事は過去の歴史上の事實に關するを以て矢張 “were” とすべきである。

{ 「太閤秀吉は大英雄である。」
Taikō Hideyoshi was a great hero.

b. 「一番先きに」は邦文では無論副詞であるけれど、之を英文に譯する場合には訂正文の如く一種の形容詞とするが英語の慣用に適ふ。

c. “Abroad” は “here,” “there” などと同じく一

(43) 吾々は食ふべき食物、着るべき着物、及び住むべき家がなければならぬ。

[誤譯] We must have food to eat, clothes to wear, and a house to live.

[正譯] We must have food to eat, clothes to wear, and a house to live in.

[解説]

「食物を食ふ」「着物を着る」は單に “We eat food.” “We wear clothes.” であるけれど、「家に住む」は “We live in a house.” である、従つて「住むべき家」と云ふ時にも矢張この “in” は落さず “a house in

which to live" 又は "a house to live in" と言ふべきである、同様に

{ There was no chair to sit on (=on which to sit).
「坐るべき椅子が無かつた。」

{ We want a knife to sharpen a pencil with
(=with which to sharpen a pencil).
「鉛筆を削るにナイフが要る。」

(44) 彼は自分では勉強し過ぎて病氣になつたと云つて居るけれど、實は食ひ過ぎたのだ。

[誤譯] He himself says that he has become sick by working too hard, but in reality he has overeaten.

○ [正譯] He himself says that he has made himself sick by working too hard, but in reality he has overeaten himself.

[解説]

a. 此處の「病氣になつた」は幾分自ら求めてさうなつた心持があるからかく "has made himself sick" とする。

b. 「食ひ過ぎる」「寝過ぎる」など「……し過ぎる」と云ふ動詞は、"to overeat oneself," "to oversleep oneself" とかく常に後に "—self" の形を取るものがある、従つて上の「勉強し過ぎた」の如きも亦 "overworked himself" とするも宜しい。

(45) 外國語を學ぶ方法は練習のみ。練習せずして之に通することは到底出来ない。

[誤譯] The way to learn a foreign language is only practice. You can never master a language without practising.

[正譯] The only way to learn a foreign language is practice. You can never master a language without practising it.

[解説]

a. 邦文では「のみ」は「練習」に附いて居るけれど、英文としては之を形容詞とし定冠詞を附して「方法」の前に置く方がその慣用に適ふ、同様に

{ 「私の知つて居る米國人はあの人のみである」。
He is the only American that I know.

b. 原文では單に「練習せずして」とあるも "without practising" だけでは何を練習するか不明であるからかく "a foreign language" の代名詞として "it" を用いた譯である。

(46) 旅行は面白かつたかね。ウム、大層面白かつた。



[誤譯] Have you enjoyed your trip? Yes,
I have enjoyed very much.

Have you good time
[正譯] Have you enjoyed your trip? Yes,
I have *enjoyed myself* very much.

[解説]

見ることも聞くことも何でも荷くもして當人の愉快に感ずることは皆 "to enjoy" と謂ふ、ところで此の語は元來他動詞であるから上の "enjoyed your trip" と云ふ風にそのして愉快に感ぜしことを *Object* にするが、然らずんば "enjoyed myself" 「自分を樂ました」即ち「面白かつた」と常に後に "—self" の形をその *Object* として置かなければならない。同様に

{ How do you *amuse yourself* in rainy weather?
「雨天には何をして慰むか」。

✓ (47) 僕は君と同じ宿屋に泊つて居たけれど、君も僕もそれを知らずに居た。

[誤譯] I put up at the same hotel with you, but both you and I were not aware of the fact.

[正譯] I put up at the same hotel as you, but neither you nor I was aware of the fact.

欠

欠

“height,” 「遠近」 “distance,” 「(物の)輕重」 “weight,”
「(事の)輕重」 “importance,” 「強弱」 “strength,” 「老
幼」 “age,” 「大小」 “size,” 「(數の)多少」 “number,”
「(量の)多少」 “quantity.”

(51) 新橋の見送りは山の如く中には横濱ま
で見送つた者もあつた。

〔誤譯〕 An enormous crowd gathered at
Shimbashi to give him a send-off, and
some of them went with him to Yoko-
hama.

〔正譯〕 An enormous crowd gathered at
Shimbashi to give him a send-off, and
some of them went with him as far as
Yokohama.

〔解説〕

“To go,” “to come,” “to proceed,” “to run,” “to
ride” などに伴ふ “to” は「何處其處へ行く」「何處
其處へ來る」と云ふ風に單に方向乃至到着地を示し、
「何處其處まで」と云ふ程の強い意味は無い、「何處其
處まで」と行き又は來たる距離を示すには “as far
as” を用ふ。

✓(52) うまく行くか如何か分らないけれど、
兎に角やつて見る積りです。

[誤譯] I don't know whether I will succeed
or not, but at any rate I think to try.

[正譯] I don't know whether I shall suc-
ceed or not, but at any rate I think I
will try.

[解説]

a. 成敗は時の運で人力の如何ともするを得ざるもの
であるから一人稱に在りては "will" は無論不可で
ある。

b. 昔は「私は……する積りである」に "I think
to……" の形を用ひたけれど、今日は最早此の形は用
ひないで、上に示せる "I think I will……" "I
intend (or mean) to……" 又は "I am going to……"
などを用ふ。

比較:-

I think I will try (=I intend to try.)
「やつて見る積り」。(意向)
I think I shall succeed (=I expect to succeed.)
「成功する積り」。(豫想)

(53) 答案はペン(とインキと)で書かなけれ
ばなりません。しかし赤インキではいけ
ません。

[誤譯] You must write your examination
paper with a pen and some ink, but
you must not write it with red ink.

[正譯] You must write your examination
paper with *pen and ink*, but (you must)
not *in red ink*.

[解説]

a. "Pen and ink" は一種の對句を成して居るから
その前には冠詞も何も要らぬ、尙之に類するものに
"pen and paper," "knife and fork," "house and
land" 「家も屋敷も」。

b. 「ペン(とインキと)で書く」の「で」は純然たる
道具を表すから "with" で可いけれど、「赤インキ
で書く」など云ふ時の「で」は道具ではなく之を一種
の形體乃至材料と視て "A statue (cast) in bronze" 「銅
(で鑄た)像」などに準じ "in" を用ふ、同様に "to
paint in oils," "paintings in oils" 「油繪(を畫く)」。

"to paint *in* water-colours," "paintings *in* water-colours" [水彩畫(を畫く)], "paintings *in* black and white" [墨繪], "to speak *in* English" [英語で話す], "to write *in* English" [英語で書く], "a letter *in* French" [佛語の手紙], "a speech *in* German" [獨逸語の手紙]。

✓(54) あんな人間は當てにならぬ; 少しも約束を守らぬから。

[誤譯] Such a man can not rely: for he never keeps promise.

[正譯] Such a man can not *be relied upon*; for he never keeps *his* promise.

[解説]

a. *Active* の時

{ I *relied upon* him.
{ 「あの男を當てにして居た」。

さ "*upon*" (又は "*on*") が常に附いて居る以上は *Passive* にしたまて之を會く譯には行かない。

b. 英語では冠詞を云ふものがあつて通常常に名詞に附いて居るさ同様文句によつては常に所有格の代名詞が伴うて居て之を日本語的に考へるさ頗る奇異に感ず

るものがあるから注意。現に本間の如き邦語では單に「約束を守る」を云ふのに英語では常に一々「彼の約束を守る」「彼の約束を破る」など云ふのである。此の他に類するものを求めれば

{ 「彼は(頭に)帽子を冠り、手に杖を持つて居た」。
He had a hat on *his* head, and a cane in *his* hand.

{ 彼等は手を懐にして(懐手して)立つて居た」。
They were standing with *their* hands in *their* pockets.

{ 「もう晝飯は食つたのか」。
Have you had *your* dinner?

{ 「僕は牛乳を入れずに茶を飲む」。
I drink *my* tea without milk.

(55) 私は當地に一兩日滞在して名所舊蹟を少々見物する積りであります。

[誤譯] I am going to stay here for one day or two and visit some of the famous places and historic sites.

[正譯] I am going to stay here { for *one* or *two* days } and visit some of the famous places and historic sites.

〔解説〕

“A” は元來 “one” の變化したものであるから「一兩日」を “a day or two” とは言ふけれど、さりとて “one day or two” とは言はない、“one” を用ふる時は是非 “one or two days” とは言はなければならぬ、同様に「一兩年」 “a year or two,” “one or two years,” 「一二週間」 “a week or two,” “one or two weeks.”

✓ (56) 彼が病氣の爲め學校を缺席して居るとは残念である。

〔誤譯〕 I am regret that owing to he is illness he is absent in school.

〔正譯〕 I am sorry (or I regret) that he is absent from school owing to his illness.

〔解説〕

a. 「残念である」に對し “regret” は動詞であるから “I am regret” とは言へぬ、“I am” の形にしようと思へば形容詞の “sorry” を用ひなければならぬ。

b. 「學校を缺席して居る」は即ち其處から離れて其處に居ないの意味であるから

(He is away from home.
「彼は不在です」)

など、同様 “absent” の後には常に “from” を用ふ。

c. 「病氣の爲め」など云ふ時 “owing to” や “on account of” などを用ふるは一種の前置詞であるから、その次に “he is illness” など云ふ Clause が來ることは出來ない、是非 “owing to his illness,” “on account of (his) illness” と云ふ風にその次へは單なる Word を置かねばならない、若し特に依然 Clause を用ひやうと思へば之等の前置詞は止めて接續詞の “for,” “because” などを用ふべきである。

比較:—

{ He could not come, because he was ill.
He could not come on account of illness.

(57) 君の御留守中に起つた事は何でも早速手紙で御知らせ申します。

〔誤譯〕 I will let you know with a letter at once anything that may happen during you are absent.

〔正譯〕 I will let you know by letter at once anything that may happen { during
your absence. while
you are absent.

〔解説〕

- a. 「手紙で」「電報で」「傳言で」など通信機関を示す時は “by letter,” “by telegraph,” “by word of mouth” などの常に冠詞無き名詞に “by” を附す。
- b. “During” は一種の前置詞であるから、その次に “you are absent” など Clause が来ることは出来ない、必ず “your absence” と云ふ風に名詞(又はその代りをするもの)が来なければならない。若しその後 Clause を置かうと思へば〔正譯〕の如く “while” にしなければならない。

〔類例〕

「僕の病氣中は彼が代理をした。」

〔誤譯〕 He took my place during I was ill.

〔正譯〕 He took my place $\begin{cases} \text{during my illness.} \\ \text{while I was ill.} \end{cases}$

- ✓(58) 友達は私の到着の時間を知つて居て停車場に迎へて呉れた。(熊高工 45)

〔誤譯〕 My friends were knowing the time of my arrive and welcomed me at the station.

〔正譯〕 My friends knew the time of my arrival and met me at the station (or came to the station to meet me).

〔解説〕

- a. “Were knowing” の不可なるに就ては(27)参照。
- b. “Arrive” は動詞であつて名詞ではない。
- c. 「見送り」に對する「迎へる」「出迎へる」は普通 “to meet” で “to welcome” は所謂「歓迎する」で意味が餘りに強過ぎる。

- (59) 君は嘗て日光へ行つたことがありますか。ハイ、一度あります。

〔誤譯〕 Have you ever gone to Nikkō?
Yes, I have ever gone there.

〔正譯〕 (1) Have you ever been at Nikkō?
Yes, I have been there once.

(2) Did you ever go to Nikkō?
Yes, I went there once.

〔解説〕

- a. “Have gone,” “have come” を言へば「行つた」「来た」と云ふと同時にその半面には常に「(だからして今)行つて居る」「来て居る」と現在の状態を示すことになるから、「行つたことがある」「来たことがある」と云ふ経験の意味には (1) “have been” を用ふるが。

比較:-

{ He has gone there. 「(今)行つて居る」。
He has been there. 「行つたことがある」。

{ He has come here. 「(今)来て居る」。
He has been here. 「来たことがある」。

又は(2)の如く“ever,” “once”等自ら経験を表す副詞を附して單純なる Past を用ふ。

ところで注意すべきは(1)の如く“have been”を用ふる時はその次に來る前置詞は常に“in”又は“at”とするを云ふことである。

I have been { in Tōkyō. (大きい所)
at Nikkō. (小さい所)
「……へ行つたことがある」。

I have been to Nikkō.
「……………へ行つて來た」。

They have gone to Nikkō.
「……………へ行つて居る」。

次に“ever”は「嘗て」「何時か」でも、之は

Did you ever go there?
「何時か行つたことがあるか」。

Do you ever go there?
「何時か行くことがあるか」。

If you ever go there, ……
「若しや行くことがあるなら、……」。

と云ふ風に常に疑問又は條件文に用ひ、普通の肯定の「嘗て」には“once”を用ふ。

(60) 僕の弟は角力を取つて踝を挫いて三日前から少しも歩行が出来ずに居る。

〔誤譯〕 My younger brother wrestled and sprained his ankle, and can not have walked at all since three days ago.

〔正譯〕 Brother sprained his ankle while wrestling, and has not been able to walk for the last three days.
these three days.

〔解説〕

a. 「角力を取つて踝を挫いた」は實は「角力を取つて居る間に踝を挫いた」であるから〔正譯〕の如くする方が優つて居る。

b. 英語で「三日前から」など云ふ時その「前」と「から」を別々に示すことは出来ない、その意味を取つて〔正譯〕の如く「三日此の方」の形にするか又は單に“for three days”とする、尤も唯だ“for three days”「三日間」では何だか物足りないやうな氣がするけれど、之はそれに伴ふ動詞の Tense によつて「今日迄三日間」と云ふことは自ら分るのである。

6. 次に「(今日迄).....することが出来なかつた」と云ふ時 “cannot have.....” は不可である、かうするに例へば

He cannot have done such a thing.

「彼はそんな事をした筈がない」。

さ云ふ如く推定の意味になる。それで本問の如く「(今日迄).....することが出来なかつた」など Present Perfect, 乃至 Past Perfect, Future (Perfect) の能力に関しては “can” そのものには之を表す形が缺けて居るからその代りとして “to be able to.....” を用ふ。即ち

現在:	-I can... (=I am able to.....)
過去:	-I could... (=I was able to.....)
未来:	- I shall be able to.....
現在完了:	- I have been able to.....
過去完了:	- I had been able to.....
未来完了:	- I shall have been able to

(61) 僕は三時間以上も待つて居たけれど、
到頭彼は来なかつた。

[誤譯] I was waiting him for three long hours, but he did not come at last.

[正譯] I was waiting for him for three long hours, but he did not come after all.

[解説]

a. 「.....を待つ」は邦語では他動詞だけれど英語の “to wait” は自動詞でその次には必ず “for” を要する、但し “to await” ならば矢張他動詞で前置詞は不要。序に

比較:-

{ To wait for 「待つ」。
To wait on 「侍る」「給侍する」「伺候する」。

b. “At last” や “at length” は「幾多の困難(や時日)を経て後遂にその目的を達した」と云ふやうな場合に用ひ、本問の如く「折角.....したのにも拘らず到頭」とその結果が豫期に反せし時は “after all” を用ふ。

比較:-

{ They attacked the enemy day and night and made their enemy surrender at last.
「日夜攻撃して到頭敵を降参させた」。
They defended themselves desperately, but they had to surrender after all.
「必死になつて防戦したけれど、到頭降参した」。

(62) 難破船の船員数名はその時通り掛つた汽船に救助せられましたが、其他は皆溺死しました。(商船 38)

〔誤譯〕 Some of the crew of the wrecked ship was saved by the steamer which happened to pass there at the time, but the rest all drowned.

〔正譯〕 Some of the crew of the wrecked ship were saved by the steamer which happened to pass there at the time, but the rest were all drowned.

〔解説〕
a. この「救助せられた」の Subject は前の "some" であつて、しかも "some" は形は單數でも意味は複數であるから無論 "were saved" とすべきである。

b. 「溺死する」は邦語では自動詞であるけれど英語の "to drown" は「溺らす」と云ふ他動詞であるから、之を「溺死した」と自動詞的に用ひようと思へば "were drowned" と *Passive* にしなければならぬ。

比較:—

She drowned herself in a river.
「川に身を投げた(入水した)。」
She was drowned in a river.
「(過つて) 川で溺死した。」

此の他邦語では自動詞でしかも英語では常に *Passive* を用ふべきものには "to be wrecked" 「難破する」、
"to be tired" 「疲れる」、
"to be taken ill" 「病氣になる」、
"to be pleased" 「氣に入る」、
"to be astonished" 「驚く」(7参照) 等がある。

(63) 僕の家は學校へ遠い。學校へ行くには少くも三十分はかゝる。●

〔誤譯〕 My house is far to school. It takes thirty minutes at least to go to school.

〔正譯〕 My house is far from the school. It takes half an hour at least to go to school.

〔解説〕

a. 「……へ遠い」は實は「……から距るこゝ遠し」の義であるから "far from……" でなければならぬ。

b. 「學校へ遠い」の「學校」は後の「學校へ行く」の學校と異なり單に校舎を指すから冠詞が要る。

e. 「三十分」は即ち「半時間」であらから通例 “half an hour” と言ふ、同様に「九時十五分」は “a quarter past nine (o'clock)” で “a quarter” は「(一時間の四分の一) 即ち「十五分」である。

(64) 橋が落ちてその上に居た見物人は水の中へ落ち込んだ。

[誤譯] The bridge fell and the spectators on it fell into the water.

[正譯] The bridge ~~gave way~~ and the spectators on it fell into the water.

[解説]

かいる場合の「落ちた」は「その上に在りし物の重量に堪へ兼ねて落ちた」の意味であるから “fell” では不可である。同様に

{ 「二階が落ちて数人の人が即座に死んだ」。
The floor *gave way*, and several men were killed on the spot.

(65) 此處は大層日當りがよい、朝から晩まで窓から日が射し込む。

[誤譯] Here is very sunny; the sun shines from the window from the morning till the evening.

[正譯] ~~It is very sunny here; the sun shines through the window from morning till evening.~~

[解説]

a. 「日當りがよい」も「今日は天気がよい」 “It is fine to-day.” 「此處は非常に寒い」 “It is very cold here.” などと同じく “it is” を用ふ。

b. 「窓から射し込む」の「から」は隙間を通り抜ける心持であるから “through” でなければならぬ。

c. “From morning till evening” は一種の對句を成せる熟語であるから冠詞は不要。

(66) 此の外套を着て見給へ、僕には少し大き過ぎるけれど君には丁度好いかも知れない。

[誤譯] Put on and try this overcoat; it is too large for me, but it may be just good for you.

[正譯] Try on this overcoat; it is too loose for me, but it may be just right for you (or fit you exactly).

〔解説〕

a. "To put on" 「着る」が元で、その動詞を變へて簡単に様々の着方を表し得ることに注意、即ち "to throw on" 「(投げる様に)着る、即ち引掛ける」、"to try on" 「(假縫の時などに)着て見る」、"to fit on" 「(身體に合ふか合はぬか)着て見る」、"to have on" 「着て居る」、"to keep on" 「(脱がずに)その儘着て居る」。

b. 着物の「大きい」は即ち「寛(ユル)い」「ダブダブする」であるから寧ろ "loose" の方が可からう。

c. 「君に丁度好い」は實は「丁度君(の身體)に合ふ」であるから "to fit you exactly" とすべきである、尙この "exactly" の代りに "to a nicety," "to a T" など云ふ熟語を用ふることもある。

✓ (67) 僕はそれを皆十圓で買った、一つ二圓宛で。

〔誤譯〕 I have bought them all with 10 yen; with 2 yen apiece.

〔正譯〕 I have bought them all for 10 yen; at 2 yen apiece.

〔解説〕

a. 「十圓で買った」「五圓で賣つた」など云ふ時の「で」は即ちその金額と品物と交換する意味であるから "for" としなければならぬ。

✓ b. 「一つ二圓宛で」など云ふ時の「で」は矢張同じ「で」でも今度は「一つ二圓宛の割合で」であるから "at" となる。

〔参考〕

The train runs at the rate of 40 miles an hour.
「流車は一時間四十哩の速力で走る」。

(68) 彼は今肺を病んで居るが、彼の兄弟も一昨年全病で死んだ。

〔誤譯〕 He is suffering consumption now, but his brother also died from the same disease the year before last.

〔正譯〕 He is suffering from consumption now, and his brother also died of the same disease the year before last.

〔解説〕

a. "To be suffering" が「(何病に)惱んで居る」「罹つて居る」「患つて居る」「病んで居る」と云ふ時は自動詞で、その次には原因を示す前置詞の "from" を要する。

比較:—

To be suffering from a fever.
To be sick of a fever.
To be ill with a fever.

6. 「(何病)で死ぬる」と云ふ時の「で」は通例 “of” である。

比較:-

To die of a disease. 「病氣の爲め」。
To die from overwork. 「……が原因で」。
To die by violence. 「變死(横死)する」。

但し此處は「矢張その病氣で斃れた」の意味にし “*succumbed to the same illness.*” 「矢張その病氣の犠牲となつて仆れた」とし “*fell a prey to the same malady*” などするも可。

c. 本文の「が」は前後二文の何等相反せる事を表すではなく、唯だ之を繋ぐに過ぎないから “and” とすべきである。

✓ (69) 神戸高等商業學校の卒業式は、昨日全校講堂で舉行せられた。

[誤譯] The graduation ceremony of Kōbe Higher Commercial School was taken place on the day before yesterday.

[正譯] The graduation ceremony of the Kōbe Higher Commercial School took place (or was held) the day before yesterday.

[解説]

a. 學校、官廳、神社佛團、戲場等公共の設立物の名は固有名詞でも常に定冠詞を附す。

b. “To take place” は自動詞で *Passive* は無い、*Passive* を用ひようと思へば [正譯] の如く “*was held*” とすべきである。

c. “The day before yesterday” などには前置詞は不要。

(70) 高等學校の入學試験は評判ほど六ヶ敷ありません。(高等 42)

[誤譯] The entrance examination of the High Schools is not so difficult as report.

[正譯] The entrance examination into the High Schools is not so difficult as ~~it is reported to be.~~

[解説]

a. 「……の入學試験」に就ては (30) 参照。

b. “As report” では「高等學校の入學試験」と云ふものと「評判」と云ふものとを比較して居ることになつて意味を成さぬ。是非 [正譯] の如くしてその「六ヶ敷さの程度」を比較せねばならない。[正譯] の “as it is

reported to be” の後には “difficult” が略せられて居て、つまり「高等学校の入学試験は之々丈け六ヶしいさ云ふがそれ程は」の意である。

(71) 彼は校長の依頼により歐洲戦争の將來と云ふことに就て英語の講演をした。

〔誤譯〕 He made a lecture of English about the future of the European War by the request of the principal.

〔正譯〕 He gave a lecture in English on the future of the European War at the request of the principal.

〔解説〕

a. 「演説をする」は “to make (or deliver) a speech” と言ふけれど、「講演する」は普通 “to give (or deliver) a lecture (or an address)” と言ふ。

b. “In English” に就ては (53) 参照。

c. 「……に就て」が單に「……に就て話をする」位でなく、「それを問題として論ずる」「それを演題として演説する」など云ふ時は “on” を用ふ。

d. 「……の依頼によつて」の「よつて」が “at” なるに注意。

比較:—

At one's request, instance 「是非にこの頼み」、
instigation 「煽動」、etc.
By one's desire 「希望」、order 「命令」、per-
mission 「許可」、etc.
On one's advice 「忠告」、suggestion 「發議」、
recommendation 「推薦」、etc.

(72) 私は此の休みには山の中で過ごすことに定めたが、初めは淺間山に登り夫れより木曾で山の景色を見る積りである。

(外語 35)

〔誤譯〕 I have decided to pass my time in the mountain during this vacation, but I intend to climb on Mt. Asama first, and then to see the mountain scenery at Kiso.

〔正譯〕 I have decided to pass (or decided on passing) next vacation among the mountains. I intend to climb Mt. Asama and then to enjoy the mountain scenery of Kiso.

〔解説〕

- a. 「此の休みには……で過ごす」は結局「此の休みを……で過ごす」に外ならないから “to pass next vacation” の簡単なるに如かない。それから「此の休み」は即ち「この次の休み」であらうから “next vacation” 又は “the (coming) vacation” とする方がよい。
- b. 「定めたが」の「が」は唯だ邦語の續き合ひ上用いた丈けで「しかしながら」など云ふ意味は更に無い、だから之は英譯の場合にては省いて宜しく又 “and” として前後二文を繋ぐも宜し。
- b. “In the mountain” では何處か定まれる一つの山に籠るやうな意味になつて當らない。
- d. 「浅間山に登る」と云ふ時 “to climb” や “to ascend” を用ふるに之等の語は英語では他動詞であるからその次に邦語の「に」に相當する前置詞は通例不要、但し之を “to go up Mt. Asama” とすることは無論差支へない。
- e. 「山の景色を見る」の「見る」は “to see” でも不可ではないが、かく「見て楽しむ」には “to enjoy” の方が更によい。一體この “to enjoy” と云ふ語は調法な語で見ることでも聞くことでも總てかくして當人が快く感ずるものは皆 “to enjoy” と言へる、即ち “to enjoy flowers” 「花を見て楽しむ」、 “to enjoy music” 「音楽を聞いて楽しむ」、 “to enjoy boating” 「端艇を漕いで遊ぶ」、 “to enjoy reading” 「本を讀んで楽し

む)、 “to enjoy conversation” 「(面白いと思つて)話をする」、 “to enjoy one's meal” 「飯がうまく食へる」。

f. 「本曾で山の景色」は「木曾の山の景色」とする方がよからう。

(73) 百弗と言へば僕等には中々大金だけれどあの男には何でもない。

〔誤譯〕 A hundred dollars are quite a large money to us, but they are nothing to him.

〔正譯〕 A hundred dollars is quite a large sum of money, but it is nothing to him.

〔解説〕

- a. “A hundred dollars” は成程形は複數に違ひないけれど此處では意味は「百弗(と云ふ金額)」と單數に外ならないから矢張單數として取扱ひ動詞は “is” 代名詞は “it” である。
- b. 「大金」は即ち「大等金額」である故に “a large sum of money” としなければならぬ、 “money” は物質名詞で従つて之に直接に “a” を附することは出来ない。

(74) この子は字が上手で展覧會のある度毎に賞品を貰ふ。

〔誤譯〕 This boy writes well and gets a prize whenever there is an exhibition.

〔正譯〕 This boy writes a good hand and gets a prize at every exhibition.

〔解説〕

a. "To write well" では "to be a good writer" 即ち「文章が上手」の意味にしかならぬ、「字が上手」は即ち「手が良い」で "to write a good hand"、「字が下手」は "to write a bad hand" とすべきである。

b. 「展覧會がある度毎に」は "at every exhibition" の簡潔なるに如かない。

(75) 寺は山頂より少し下にあつて、寺の境内に日露戦争の記念碑がある。

〔誤譯〕 There is the temple a little under the summit of the mountain and there is a monument of the Russo-Japanese War.

〔正譯〕 The temple is a little way below the summit of the mountain and there stands a monument in memory of the Russo-Japanese War.

〔解説〕

a. 「何處其處に何それが在る」と其處に在る物の名を示すことを主にする時は "there is" の形を用ふるけれど、「何それは何處其處に在る」と物の在り場所を示す時は此の形は用ひない。

比較一

}	What is there on the table?
	「机の上には何があるか」。
}	There is a book on the table.
	「机の上には本がある」。
}	Where is the book?
	「本は何處にあるか」。
}	It is on the table.
	「(本は)机の上にある」。

b. 本文の「少し」は「少し下つた所」と距離を示すから "way" を入れた方が宜い。

〔参考〕

}	「山の半程の所で休息した」。
	We rested half-way up the mountain.

c. "Under" は "over" 「真上に」の反対の「真下に」で當らない、此處は是非「……より下の方」と "below" ("above" の反対) を用ひなければならぬ。

比較:-

{ Below the bridge. 「橋の下手に」。
 { Under the bridge. 「橋の真下に」。

d. 「日露戦争の記念碑」は即ち「それを記念する爲めの…」であるから "in memory of" なる句を入れる方が宜しい、"stands" は記念碑なる故 "is" に代へた迄で亦 "is erected" とするも宜しく、この他山には "to rise," 川には "to run" などを用ふ。

(76) 彼は入學試験に失敗した、けれどもそれをば友人に隠して居る。

〔誤譯〕 He has failed in the entrance examination, but he is concealing it to his friends.

〔正譯〕 He has failed in the entrance examination, but he conceals it from his friends.

〔解説〕

○ 「友人に隠して居る」の「に」はつまり先方をばその事件より遠ざけその真相を知らさぬ意味であるから "from" である。

〔参考〕

{ The nest was hidden from view by the trees.
 { 「その巢は木に隠れて目に見えなかつた」。

{ I keep nothing a secret from you.
 { 「僕は何事も君に秘密にして置きはせぬ」。

○ それからかゝる場合の「隠して居る」は「……して居る」でも之は本來自ら繼續的の意味であるから進行形にはしない(27. 28. 29. 参照)。

(77) 彼の人には佛語を話すさうだが、僕はまだ彼の人のお話すのを聞いたことがありません。(海兵 43)

〔誤譯〕 I am told that he speaks the French, but I have never heard him to speak it.

〔正譯〕 I am told that he speaks French, but I have never heard him speak it.

〔解説〕

a. 英語、佛語など單に國語を指す時は冠詞は不要(26. 参照)。

b. 前に "see," "hear" など知覚を表す動詞のある時は *Passive* でない限りはその後に來りて之が *Complement* たる *Infinitive* の "to" を省くと云ふのが文法の定則 (8. 参照)。

(78) 山田君が今度官命を帶び洋行することとなつたので、氏の爲め友人が送別會を催した。

【誤譯】 Mr. Yamada is to go abroad with an official mission, and his friends held a farewell dinner for him.

【正譯】 Mr. Yamada is to go abroad *on* an official mission, and his friends gave a farewell dinner *in honour of* him.

【解説】

a. 「官命を帶び」は即ち「官命で」で、かく「用事で」「用達しに」「使ひに」「旅行に」など云ふ時の「で」又は「に」には "on" を用ふ。

比較:-

比較 } To go on business 「用達しに」、on an errand 「使ひに」、on a mission 「使命を帶びて」、on an embassy 「使節に」、on a special service 「特別任務を帶びて」、on a journey 「旅行に」、on a trip 「(見物の小)旅

行に)、on a tour 「漫遊に」、on a visit 「泊りがけに」、on an excursion 「遠足に」、on a voyage 「航海に」、etc.

To go for pleasure 「遊びに」、for a walk 「散歩に」、for a ride 「馬で(運動に)」、for a drive 「馬車で(運動に)」、for a bathe 「水泳に」、for a row 「舟漕ぎに」、etc.

b. 此處は「送別の宴會」の積りで "a farewell (or send-off) dinner" としたから、「開催する」と云ふ意味の動詞は "to give" でなければならない、若し之を "a farewell meeting" とすればそれは "to hold" でよいけれど。

比較:-

比較 } To give a dinner 「宴會」、a garden party 「園遊會」、an evening party 「夜會」、a dinner party 「午(晩)宴會」、a send-off dinner 「送別(の宴)會」、a ball 「舞踏會」。
To hold a meeting 「會」、a general meeting 「總會」、a welcome meeting 「歡迎會」、a farewell meeting 「送別會」、etc.

c. 「氏の爲め」の「の爲め」は「その人を正資として」「その人を招待して」の意味であるから "in honour of" とすべきである。

(79) 君はまだ例の栗毛の馬を持つて居るか。イヤ、賣つた、近い中に別のを買ふ積りだ。

[誤譯] Have you still the chestnut-horse?
No, I sold it and am going to buy a different one.

[正譯] Have you still the chestnut-horse?
No, I *have sold* it and am going to buy *another*.

[解説]

a. 「持つて居るか」に對しては本來ならば「持つて居る」さか「持つて居ない」さか答へるべき答である、然るにそれを「賣つた」さか答へても猶ほ目的を達するこの出来るのは全く“*I have sold it.*”と現在完了にするからその裏面に「(だからして今は)持つてない」となる爲めなので、若し之を“*I sold it.*”と單に過去にしたのでは成程一旦は賣つたであらうけれど今は更に復それを買つたかも知れないので先方の間に對して決して適當な返答とは言へない。

b. “*A different one*” は “*another*” の簡潔なるに如かぬ。

(80) 圓城寺君があんなことをしようとは夢にも思ひませんでした。(神高商 40)

[誤譯] I never dreamed that Mr. Enjōji ^{would} will do such a thing.

[正譯] I never dreamed that Mr. Enjōji *would* (dare) do such a thing.

[解説]

「しようとは夢にも思ひませんでした」は一才考へるさ“*I never dreamed that Mr. Enjōji will do.....*”で少しも誤は無いやうであるけれど、英語では丁度かの代數學で

$$x(a+b)=ax+bx$$

さ前項 *a* が *ax* となると同時に後項 *b* も亦 *bx* となると同様、前に一旦過去の動詞を用ふるさその影響を受けてその後にある動詞は通例矢張皆過去(又は過去完了)となるのである。文法上之を時態連續法 (*Sequence of Tenses*) と稱し、邦文と頗るその趣を異にして居るから大いに注意を要する。

[備考]

“*I never dreamed*” は “*I little dreamed*,” “*Little did I dream*” などするさ意味が一層強くなる。さう

して此の場合の "little" は "not at all" の義で決して普通の「殆んど……せぬ」の意ではない。

- (81) 植木屋は今朝七時半迄に来ると申しましたが、未だ参りません。
(東高商 大正 5)

〔誤譯〕 The gardener said that he will come till half past seven this morning, but he does not come yet.

〔正譯〕 The gardener said that he *would* come (here) *by* half past seven this morning, but he *has not turned up* yet.

〔解説〕

a. "Will come" を "would come" とするに就ては前問参照。

b. 「迄に」 とその時迄に或る動作の完了を示すには "by" を用ひ、之に對し "till" は單に「迄」とその時迄の動作の繼續を表す。

比較:-

{	I shall be here <i>till</i> six.
	「六時まで此處に居ります」。
	I shall be here <i>by</i> six.
	「六時までに此處へ來ます」。

4. 「未だ参りません」は動作の完了を示して居るから是非 *Present Perfect* にしなければならない。文中 "turned up" は矢張り前の通り單に "come" としても無論間違ではないけれど、それでは同じ語が二つ重なるから態さ之と同意語の他の語を用ひて以て文に變化あらしめたのである。

- (82) その頃は人々は地球が圓いと云ふことを知らなかつた。

〔誤譯〕 In those days people did not know that the earth was round.

〔正譯〕 In those days people did not know that the earth *is* round.

〔解説〕

前節に於て英語では前に一旦過去の動詞を用ふるさその影響を受けその後に来る動詞は總て又過去(完了)となるべきことを説いたが之には例外がある。即ち本文の如く「地球は圓い」とか「人は死すべきものなり」とかその時の古今洋の東西を問はず一貫して常に變ることなき事實は例令その前に過去の動詞があらうとも少しもその影響を受けず何處までも矢張現在である。

- (83) 明日午前八時に御宅へ参ると A 君は申しました。(一高 35)

〔誤譯〕 Mr. A said that he will call on you
(or call at your house) at eight (o'clock)
to-morrow morning.

〔正譯〕 Mr. A said that he *would call* on
you (or call at your house) at eight
(o'clock) to-morrow morning.

〔解説〕

(80.) に於て述べたる理由に基き “Mr. A said that
he will call” では不可である。但しかる場合でも
Quotation-marks (“ ”) の中に入れ、言はば $x(a+b)$ と
括弧を附けた形にして

Mr. A said, “I will call on him at eight (o'clock)
to-morrow morning.”

とするとそんな必要は無い。但しその代りこの形を用
ふるに最早その先方の人に対し單に A 君の云つた文句
の意味のみを傳へるのではなく A 君の云つた言葉その
儘を示すことになるから、その結果として自然 “he”
は本人たる “I” に、“you” は第三者たる “him” と
なるべきである。序に後の形の如くその當人の用ひし
文句その儘を傳へる形を文法上直接話法 (Direct Nar-
ration), 前の形の如くその趣意のみを傳へる形を間接
話法 (Indirect Narration) と謂ふ。

(84) 此處で御目に掛からうとは夢にも思ひ
ませんでした。(陸士 40)

〔誤譯〕 I never dreamed that I shall see
you here.

〔正譯〕 I never dreamed that I *should see*
you here.

〔解説〕

正誤の理由は 80. に同じ。

(85) こんな天氣の好い日にならうとは思は
なかつた。

〔誤譯〕 I did not expect that it will be a
such fine day.

〔正譯〕 I did not expect that it *would be*
such a fine (day.)

〔解説〕

a. “Will be” を “would be” とするに就ては前二
問参照。尙本文は如何にも意外であるこの意を一層強
く言ひ表す爲め “be” の代りに “turn out” を用ふる
も可。

〔類例〕

The report *turned out* (=proved) false.
 「評判は(意外にも)虚であることが分つた」。

それから天気などの事はかく出来事として “it” を主語とする代りに “we have……” と吾人の経験の形にし後の方は “we should have such a fine day” としても可い。

b. “Such” は形容詞であるから成る丈けその形容する名詞と接近せしめようとの考よりして “a” はその中間に挿ますして之を前へ出す、之に反し “so” は副詞であるから之はその形容する形容詞と成る丈け接近せしめ “a” は却つて直接名詞の前へ置く。

比較:—

{ It is *such* a fine day.
 { It is *so* fine a day.

{ *What* a fine day it is!
 { *How* fine a day, it is!

○ (86) あなたの伯父さんはもう御出発になりましたか。(外語 43)

〔誤譯〕 Did your uncle start already?

〔正譯〕 *Has* your uncle started *yet*?

〔解説〕

a. 「もう御出発になりましたか」の如く動作の完了を示す時は常に *Present Perfect* を用ふ。

b. 「もう……したか」の如く疑問文の「もう」には普通 “*yet*” を用ふ。但し疑問文と雖も絶対に “*already*” を用ひないのではない、唯だ “*yet*” を用ひたる時 “*already*” を用ひたる時は幾分その心持を異にする。

比較:—

{ Has the bell rung *yet*?
 { 「鐘はもう鳴りましたか(未だですか)」。
 { —普通の疑問
 { Has the bell rung *already*?
 { 「鐘ははや鳴つたのですか(えい)」。
 { —驚きの口調

(87) 何時御越しでした、あなたが當地に御滞在中心とは少しも知りませんでした。

〔誤譯〕 When have you come here? I did not know at all that you are staying here.

〔正譯〕 When *did* you come here? I did not know at all that you *were* staying here.

〔解説〕

a. 「何時御越しでした」とその人に相対して言ふからには無論先方の人は今その地へ来て居るには相違ないけれど、さりとてこんな場合に “have come” と *Present Perfect* を用ふることは出来ない、何故なれば成程その人は今現にその土地へ来ては居るもの、「何時」と言ふ言葉はその時こそ判然と分らないけれど、兎も角も或る過去を示して居るのであるから、“He has come here yesterday.” と言へないと同様に “When have you come here?” と言ふことは出来ない。要するに *Present Perfect* は疑問の場合の “When?” と共に用ふることは出来ないのである。

b. “Are staying” の不可なる譯に就ては 80、参照。

(88) 雨が上つてから一度も出かけませんでした。(二高 41)

〔誤譯〕 I have never gone out since the rain was over.

〔正譯〕 I have never *been* out since the rain was over.

〔解説〕

“Have gone out” と *Present Perfect* を用ふれば「出かけた」と言ふと同時に「今出掛けて居る」と言ふ意

味になる、しかもさう云ふ當人が今そこに居る譯は無いからして一人稱 (I) 及び二人稱 (you) にはこの “*have gone*” の形は通例用ひないのである。

(89) 東京で御目に掛かつてからかれこれ二年立ちました。(四高 41)

〔誤譯〕 About two years passed from the time that I saw you in Tokyo.

〔正譯〕 About two years *have passed since* I saw you (last) in Tokyo.

〔解説〕

a. 「お目に掛かつてから」は即ち「お目に掛かつた時から」であるけれど “from” では不可である、“from” は単に「から」の義に過ぎないので、本文の如く「……から」と言ふと同時に「今迄」の意味を含む時は常に “since” を用ふべきである。

b. かく「何時々々から今日迄」と “since” に伴ひ現在迄の事を言ふ時は “have passed” と常に *Present Perfect* とすべきである、但しその構造を變じ「……してからかれこれ二年になる」、即ち

It is about two years since I saw you (last) in Tokyo.

とすれば “since” の前は “It is……” と常に現在である。

〔備考〕

“About two years” は “two years or so” とするも宜しく、それから又文中 “last” は「此の前」の義で之は強ち無くとも可。

(90) 彼も既に六十の坂を越したから身代を二人の息子に分けて隠居した。

〔誤譯〕 As he was now on the shady side of sixty, he divided his property to his two sons and retired from active life.

〔正譯〕 As he was now on the shady (or wrong) side of sixty, he divided his property *between* his two sons and retired from active life.

〔解説〕

單に「誰某に何を與へる」なら “to give.....to ——” で可いけれど、本文の如く「分ち與へる」と云ふ場合には二人の時は “between,” 三人又は三人以上の時は “among” とすべきである。

(91) 人は己の眞の友を知らぬことがある、だからして友を撰ぶには大いに注意すべし。

〔誤譯〕 One sometimes does not know his true friend, so he should be very careful in the choice of his companions.

〔正譯〕 One does not *always* know *one's* true friend, so *one* should be very careful in the choice of *one's* companions.

〔解説〕

a. 「……………せぬことがある」と云ふ時英語では普通 “sometimes.....not” と云ふ形は用ひないで、寧ろその裏面から「何時も……だと云ふ譯ではない(……することもあるが亦……せぬこともある)」と “not.....always” の形を用ふ。

b. 前に一旦 “one” を用ひたならば之を受くる代名詞は何處までも “one's,” “oneself” で、“him,” “himself” などいはずが原則である。但し單に “one” でなく “some one,” “no one,” “any one,” “every one” など云ふ時は矢張普通 “he,” “his,” “him” など受ける。

【参考】

Some one has left his umbrella.
「誰か傘を忘れて行つた者がある」。

Every man has his fault.
「人にして缺點の無い者は無い」。

(92) 一旦緩急あらば吾々は皆吾々の祖先の
此の國土の爲めに身命を抛つ覺悟であ
る。

【誤譯】 In case of emergency we are all
ready to lay down our life for our
fathers' this land.

【正譯】 In (case of) emergency we are all
ready to lay down our *lives* for *this land*
of our fathers'.

【解説】

a. 「命(イノチ)」「一命」「身命」など云ふ時の "life" は普通名詞で、従つて大勢の時は "lives" を複数にすべきである。

b. 「吾々の祖先の此の國土」など云ふ時は今日の英語では "this land of our fathers'" を後の方が「吾々

の祖先のい」を何だか一見頗る迂遠なるが如き言ひ方を
にするが却つて正しい。同様に「君の其の外套」は
"that overcoat of yours"、「僕の此の寫眞」は "this
photograph of mine"。

(93) 彼は僕より三つ年上で級中の誰よりも
年がいつて居る。恐らく全校中一番年を
取つた生徒だらう。

【誤譯】 He is three years older than me
and older than any student in the class;
perhaps he is the oldest student in the
all school.

【正譯】 He is three years older than I and
older than any *other* student in the
class; perhaps he is the oldest student
in { *all the* / *the whole* } school.

【解説】

a. 「僕より三つ年上」は實は "three years older than I am (old)," の略であるから、文中の「僕」は無論 "I" を主格でなければならない。

比較:-

He loves you better than I.
(=He loves you better than I love you).
He loves you better than me.
(=He loves you better than he loves me).

9 b. 「級中の誰よりも」とあればさて“any student”としたでは、“any student”の中へは無論“he”も含まれて居るから不合理である、是非〔正譯〕の如く“any other student”と“other”を加へる必要がある。

c. “All”や“both”などは常に定冠詞の前に置く。

(94) 大阪には高等學校は無いが、京都にはある。名は第三高等學校だけれど入學志願者の多い點に於ては全國第二位である。

〔誤譯〕 There is not a high school in Osaka, but there is ^{one} in Kyoto. Although its name is the Third High School, it ranks second in the whole country in the number of the applicants for admission into it.

〔正譯〕 There is *no* high school in Osaka, but there is *one* in Kyoto. Although its name is The Third High School, it ranks second in the whole country in the number of the applicants for admission into it.

〔解説〕

a. 「……がある」「……が無い」と物の有無に就て言ふ時の「無い」には普通“no”を用ひ、“not a……”は「……でない」と事實を否定する時に用ふ。

比較:-

There is *no* Englishman in this school.
「此の學校には英國人は居ない」。(無)
He is *not an* Englishman, but an American.
「英國人ではなくて、米國人だ」。(非)

但し極めて意味を強く言ふ時には之を逆に用ふ。

比較:-

There is *no one* in the street.
「通りには誰も居ない」。
There is *not a soul* in the street.
「通りには人つ子一人居ない」。

He is *not a* scholar.
「學者ではない(何か外の者だ)」。
He is *no* scholar.
「學者なものか(學問なぞ少しも無い)」。

b. 「京都にはある」は無論「京都には高等學校がある」の略であるから、迂遠を厭はれば更に“a high school”を今一回繰返すか、然らずんば簡単にその代名詞たる“one”を用ふべきである。

(95) 昨朝學校へ行く途中で僕の兄の舊友村田氏に出會うた。(山高商 44)

[誤譯] On the way to school yesterday morning, I met Mr. Murata, an old friend of my elder brother's.

[正譯] On my way to school yesterday morning, I met Mr. Murata, an old friend of my (elder) brother's.

〔解説〕

単に「途中」と云ふ時は“on the way”だけれど、「……へ行く途中」とその後に行先を示す語がある時は通例“the”を變じて所有格の代名詞にする。

・比較:—

{ When I was going to school, I met him *on the way*.
I met him *on my way* to school.

(96) 平時と戦時とは軍隊の編成が違ふ。

[誤譯] The constitution of the forces differs at peace with at war.

[正譯] The constitution of the forces differs in time of peace from what it is in time of war.

〔解説〕

a. “Differ”の後にあつて「……と違ふ」の「と」には“from”を用ひ、“with”を用ふれば意見の相違になる。

〔参考〕

I differ with you on that point.
「僕も其の點は君と意見が違ふ」。

b. “At peace,” “at war” は次例の如く平和、交戦の状態を示し、「平時」「戦時」と時を表すことにはならない。

Japan and Russia are now *at peace*.

「日本と露西亞とは目下平和である」。

Japan and Germany are now *at war*.

「日本と獨逸とは目下交戦中である」。

c. 「戦時とは」は即ち〔正譯〕の如く「戦時に於ては斯々である」と云ふそれとは「と」を敷衍する必要があらう。

(97) 北海道の寒さがひどいとて西比利亞の寒さはもつとひどい。

[誤譯] However severe the cold of Hokkaidō is, the cold of Siberia is severer.

〔正譯〕 However severe the cold *in Hokkaidō* may be, that in Siberia is more so.

〔解説〕

a. 「北海道の寒さ」は實は「北海道に於ける寒さ」であるから “of” は不可である。尙此の他「の」は場合々々に應じて様々の前置詞を用ひなければならぬことに注意、例へば「向島の櫻」“the cherry-trees at Mukō-jima” (小さい所)、「比良の暮雪」“the evening snow on Hirayama,”「九州の人」“a man from Kyūshū” (出所)、「馬琴の小説」“a novel by Bakin” (作者)、「消化不良の薬」“a medicine for indigestion” (目的)、「五圓の小切手」“a cheque for five yen” (交換)等。

b. “However,” “whoever,” “whenever” などで始まる「……するとも」「……するまで(も)」と云ふ句の中の動詞は “may……” とするが普通である。

c. “That in Siberia” は “the cold” を反覆するを避けたもの。

d. “Severer” でも別に差支へはないけれど、かく “more so” を用ふるに “severe” なる語を二度繰返さなくて済む。

(98) その本は取次販賣所の手を経たよりも直接に版元へ注文した方が御徳です。

〔誤譯〕 It will be less expensive to order the book direct to the publisher than through an agency.

〔正譯〕 It *would* be less expensive to order the book direct from the publisher than through an agency.

〔解説〕

a. “Will be” でもよけれど “would be” とするに「假に直接版元へ注文したとしたり」と自ら假定の意を含み同じく人に事を勧むるにしても一層丁寧に聞こゆ。

b. 「……へ注文する」と云ふ時動詞 “to order” を用ふるに邦語の「へ」はその品物の出所を表す心持で “from” となる、但し “order” を名詞にし “to give an order” の形にすれば「へ」は矢張 “to” で宜しい。

比較:—

{ 「洋服屋へ上衣を注文した。」
I ordered a coat from a tailor.
I gave an order for a coat to a tailor.

(99) 明日は餘り忙しくて御面會も出来まいと思ひます、次の日曜の午後一時から三時迄の間に御出で下さい。

〔誤譯〕 I think I ^{shall} will be too busy to see you to-morrow; please call on me from one to three o'clock on the afternoon of next Sunday.

〔正譯〕 I am afraid that I shall be too busy to see you to-morrow; please call on me between one and three o'clock next Sunday afternoon.

〔解説〕

a. 単に「……と思ふ」は“*I think*”でよいけれど、本文の如く實はさうあつて欲しくない事には“*I fear*,” “*I am afraid*,” 之と反対にさうあつて欲しい事には“*I hope*”を用ふるが普通である。

比較:—

{ *I hope* I shall succeed.
 { *I fear* I shall fail.

b. 「出来る」さか「出来ない」さか人の能力は意志で左右することは出来ないから一人稱には“*shall*”でなければならぬ。

c. 「一時から三時迄」を〔誤譯〕の如くしたではその間二時間繼續することにはなるが本問は實は「一時が

ら三時迄の間の何時か」換言すれば「一時と三時との間」に外ならないから〔正譯〕の如く“*between……and*”の形を用ふべきである。

〔類例〕

I dropped my watch between my house and the station.

「宅から停車場迄の間で時計を落した」。

d. 「次の日曜の午後」を〔誤譯〕の如くするのは冗長である、宜しく〔正譯〕の如く簡潔にすべきである。

(100) 君の御祖父様はまだ御存命ですか。
 イヤ、亡くなりました、昨年の冬九十五歳で死にました。

〔誤譯〕 Is your grandfather still living? No, he died; he died in the winter of last year at the age of ninety five.

〔正譯〕 Is your grandfather still living? No, he is dead: he died last winter at the age of ninety-five.

〔解説〕

a. 「生きて居る」(He is living.) に対して「死んだ」には形容詞を用ひ形のみは矢張現在で“*He is dead.*”

- さ言ひ、動詞 “died” はその死せし原因、時日、場所等を示す時に用ふることに注意。

{ He died of consumpt'on—last year—in Tokyo.
「去年——東京で——肺病で死んだ」。

- b. 「去年の冬」を “in the winter of last year” などするは迂遠である、宜しく〔正譯〕の如くすべきである。序にかく單に “last winter” とすれば前に何等前置詞を要せぬことに注意。

c. “Ninety-five” の Hyphen を忘れぬやうに (15 b. 参照)。

- ◎ (101) 敵の艦隊は吾々よりも遙かに優勢であつた。

〔誤譯〕 The enemy's fleet was far superior than us in strength.

〔正譯〕 The enemy's fleet was far superior to ours in strength.

〔解説〕

a. “Superior,” “inferior” 「劣る」, “anterior,” “prior” 「前」, “posterior” 「後」など本来羅句語その儘英語に借用せしものはその次に來るべき「……より」を云ふ所に常に “to” を用ふることに注意。

比較:—

{ His strength is greater than mine.
His strength is superior to mine.

- b. 原文の「吾々」は實は「吾々の艦隊」の略であるから、“our fleet” とするか少くとも “ours” とはしなければならぬ。

- (102) 僕が玄関から這入る途端に誰か裏口から出た者があつた。

〔誤譯〕 Some one went out from the back entrance just when I entered from the front door.

〔正譯〕 Some one went out at the back entrance just as I entered at the front door.

〔解説〕

a. 「……から入る」「……から出る」など出入口を示す「から」には通例常に “at” を用ひ、何か常ならぬ出入口の時のみ手段の意味の “by” を用ふ。

比較:—

{ He entered at the front door.
He entered by some secret door.

用
用

○ b. 「……する途端」など二つの動作の同時に起りし
こゝを最も強く示すものは“as”である。

〔参考〕

○ { He trembled *as* he spoke.
「彼は慄えながら物を言つた。」

(103) 君は此頃滅切り英語が上達した、君
の作文には誤が少し、か無い。

〔誤譯〕 You have lately made a remarkable
progress in your English, and there are
not a few mistakes in this your com-
position.

〔正譯〕 You have lately made a remarkable
progress in English, and there are
only a few mistakes in *this* composi-
tion of yours.

〔解説〕

○ a. 「少し、か無い」の「無い」は“only a few,” “but
few” そのもの、中に既に含まれて居るので、若し之
を〔誤譯〕の如く“not a few” などいすると却つて「少
なからず」「極めて多く」を全然反對の意味になつて
しまふ。

〔類例〕

{ I was *not a little* surprised.
「少なからず驚いた(大いに驚いた)。」

b. “This your composition” 就ては 92. b. 参照。

○ (104) 私は二月の二十九日に生れたのですか
ら、誕生日は四年に一度しか来ません。

birth (東高商 大正 5)
〔誤譯〕 As I was born on the 29th of
February, my birthday does not come
only once *in* four years.

once four years years
〔正譯〕 As I was born on the 29th of
February, my birthday *comes round* only
once *in* four years.

〔解説〕

a. 本文中の「来る」は所謂「廻り来る」であるから
“round” を加へた方がよい。

○ b. 「一度しか来ません」とあればさて〔誤譯〕の如く
しては却つて意味が反對になる。「一度しか来ません」
を云ふも實は「唯だ一度来るのみ」の意に外ならない
から、文中の否定は“only” を云ふ語その物の中から
自ら出て来るので之に更に“not” を加へては大變な
誤になる。

〔類例〕

It is *only* two miles from here to the temple.
 「此處から寺へ迄は 僅か 二哩 しかない」。

○ (105) 先達ての洪水で此の河の橋が流れて渡ることが出来ない。

〔誤譯〕 The bridge of this river flowed by the late flood and we cannot cross it over.

〔正譯〕 The bridge *over* (or *across*) this river *was carried away* by the late flood and we cannot cross it over.

○ 〔解説〕

a. 「此の河の橋」とあればさて “*of*” は不可である、橋は河を「越えて」乃至「横切りて」掛かつて居るものであるから是非〔正譯〕の如くする必要がある。(97. a. 参照)。

b. “*Flowed*” では恰も材木が河を流れ下る如く「自然に流れた」の心持で當らない、此處は「洪水に持つて行かれた」の意で “*was carried away*” を用ひて *Passive* とすべきである。

(106) 四角(ヨツカド)の所へ来て何の道を行けばよいか困つて居たら老人が来て親切に道を教えて呉れた。

〔誤譯〕 Coming to the cross-roads, I was at a loss which way to go, when an old man came and kindly taught me the way.

〔正譯〕 Coming to the cross-roads, I was at a loss which way to *take*, when a *kind* old man came and *showed* me the way.

〔解説〕

a. 「何の道を行けば」と云へど實は「何の道を取れば」と取捨撰擇の意味であるから “*to take*” とすべきである(36. a. 参照)。

b. 道を教えて呉れたればこそ實は始めてその親切が知れたのであるけれど、英語では之を形容詞としてその名詞に冠し、一見恰もその人の本来の性質の如く云ふ習慣がある。

〔類例〕

Poor little Ben is very ill.
 「可哀さうに 小ききベンは大病である」。

- c. 「道を教える」「方法を教える」など云ふ時の「教える」には教示する心持で “to show” を用ふることに注意。

〔参考〕

{ I showed the visitor into the parlour.
 { 「客人を案内して坐敷へ通した」。

- (107) 僕の生れは土佐ですが、國へ歸ることは滅多にありませぬ。

〔誤譯〕 My birth is Tosa, but I do not seldom go back to my native country.

〔正譯〕 My birthplace is Tosa, but I seldom go back to my native province.

〔解説〕

a. 「僕の生れは」は實は「僕の生れた所は」であるから〔正譯〕の如くするか又は “I was born in Tosa,” 又は “I come (or am) from Tosa” などいすべきである。

b. 「滅多に……せぬ」の「せぬ」は “seldom” の中に既に含まれて居るから、之に更に “not” を加へては却つて意味を成さぬ。

- c. 日本人が米國へでも行つて居て國へ歸るなら “my native country” でよけれど、同じ日本を云ふ “country” の中での「國」は「武蔵の國」「大和の國」「土佐の國」などの「國」で “province” でなければならぬ。従つて「郷里」を譯する場合には “one's native country, (province, city, town, or village)” など様々工夫を要する。但し單に “to go home,” “to return to one's native place” などすればそんな面倒は無い。

- (108) 掏摸がその婦人の財布を取つて逃げ出した。

〔誤譯〕 A pickpocket robbed the lady's purse and ran away at full speed.

〔正譯〕 A pickpocket robbed the lady of her purse and ran away at full speed.

〔解説〕

Rob, deprive, strip, spoil, bereave など「奪取する」と云ふ意味の動詞は一種異様の構文を成す。

比較:-

{ He stole the money from me.
 { He robbed me of my money.

- ② 即ち先づ「取られし人」を先きに示し、「取られし物」はその後に常に所有格の代名詞を冠して “of” の次に置く。

(109) あれが数ヶ月前軽井澤で外人を殺した罪人です。

[誤譯] He is the criminal killed a foreigner at Karuizawa a few months ago.

[正譯] He is the criminal *who killed* a foreigner at Karuizawa a few months ago.

[解説]

① 「英語で書いた本」と「此の本を書いた人」とは一見同じ様でしかも頗るその性質を異にして居るのである。即ち前者は實は「英語で書かれた本」であるから之を英譯するに “a book which is written in English” であつて、そしてかく *Passive* の意味の時は文中の關係代名詞と助動詞とを省きて單に “a book written in English” とすることは少しも差支へないけれど、さりとて後の「此の本を書いた人」を此の筆法で “the man written this book” は無論のこと “the man wrote this book” と云ふことも出来ない、是非完全に關係代名詞を附して “the man who wrote this book” としなければならぬ。但し若しそれが例へば

② 「机の傍で本を讀んで居る人を見た」
I saw a man [who was] reading a book at the desk.

「町に住んで居る人は通例田舎に住んで居る人よりも身體が弱い」。

{ Men living (=who live) in towns are generally more delicate in constitution than those living (=who live) in the country.

{ 「君はあの木に啼いて居るあの鳥が見えるか」。
Do you see the bird [which is] singing up on that tree?

① など進行形の場合には省略體を用ふる事が出来る。

② (110) 此の書物は丸善書店で求めました。
(海機 大正 2)

[誤譯] I bought this book at Maruzen bookstore.

[正譯] I bought this book at Maruzen's.

[解説]

所有格の後にはかく “store,” “shop,” “house” など云ふ語を省く習慣がある。

[参考]

{ I am going to the barber's [shop].
「僕は今床屋へ行くところだ」。

{ I met him at my uncle's [house].
「僕は彼に伯父の所で會つた」。

English I am inquiring...

英

英

(111) そんなに人の顔をジロジロ見るものではない、それは失禮に當ります。

〔誤譯〕 You should not stare at people's faces like that; it is a bad manner.

〔正譯〕 You should not *stare at people* (or *stare people in the face*) like that; it is bad manners.

〔解説〕

- a. "To stare at people" とか "to stare people in the face" (参照 8. b.) とは言ふけれど "to stare at people's faces" などいはず。
- b. 「行儀作法」と云ふ意味の "manners" は常に複数である。

〔類例〕

{ He has no manners.
「少しも作法を知らぬ」。

(112) 腹立ちまぎれに私は拳骨を固めてその男の頭を擲り飛ばした。

〔誤譯〕 In the heat of anger, I gave a blow to his head with a clenched fist.

〔正譯〕 In (the heat of) *my* anger, I *dealt* him a blow on the head with *my* clenched fist.

〔解説〕

- a. 單に「立腹して」は "in anger" でよけれど、「腹立ちまぎれに」「立腹の餘りに」など精神状態の極端に失せし場合には所有格の代名詞を附するが習慣である。

比較:—

- { I was in a hurry to catch the express.
「急行の間に合ふ機にさ周章てい居た」。
- { In my hurry, I forgot to buy a ticket.
「餘り周章てい、切符を買ふことを忘れた」。

- b. "Dealt him a blow on the head" に就ては 8. b. 参照。

- c. "With my clenched fist" と "my" を附するに關しては 54. b. 参照。

(113) 學年試験が近づいたから僕はその準備をしなければならない。

〔誤譯〕 Our annual examination is near at hand, and I must prepare for it.

〔正譯〕 Our annual examination is near at hand, and I must prepare *myself* for it.

〔解説〕

「試験の準備をする」は即ち自ら學力を養つて之に應ずる準備をするの義であるから常に後にかく“oneself”の形を附す。

比較:-

{	He <i>prepared</i> for the journey.
	「彼は旅行の用意をした。」
	He <i>prepared himself</i> for the examination.
	「彼は試験の準備をした。」

尙ほ下例を参考せよ。

{	I am <i>preparing</i> him for the examination.
	「彼に(教えて)試験の準備をさせて居る。」

- (114) 馬車に乗ること一時間にして吾等は淋しき一漁村に達しぬ。

〔誤譯〕 After a drive of an hour, we came to a lonely fishing village.

- 〔正譯〕 *An hour's drive brought us to a lonely fishing village.*

〔解説〕

前の通りでも強ち誤譯と言ふ迄には至らないけれど〔正譯〕の簡潔なるに如かない。

〔類例〕

{	「精出して働いて金持になつた。」
	He has <i>become</i> rich by industry.
	Industry has <i>made</i> him rich.

{	「學問をするさ人の品格が高まる。」
	If a man learns, his character will be raised by it.
	Learning <i>ennobles</i> a man's character.

- (115) 私は子供の頃一度此の本を読んだことがありますけれど、もうすっかり忘れてしまひました。

〔誤譯〕 I have read this book once when I was a boy, but I have completely forgotten it.

〔正譯〕 I *read* this book once when (I was) a boy, but I have completely forgotten it.

〔解説〕

「子供の頃」と云ふ文句がある以上は自ら劃然と過去を示して居るので、例令邦文が「……したことがある」となつて居ればさて最早之と共に *Present Perfect* を用ふることは出来ない。

(116) その商船は獨逸潜航艇の爲めに撃沈せられたが、乗組員の大多数は丁度通り掛かつた英國船に救はれた。

〔誤譯〕 The merchant ship was sunk by a German submarine boat, but the majority of its crew was rescued by an English vessel that was just passing by.

〔正譯〕 The merchant ship was sunk by a German submarine (boat), but the majority of *her* crew *were* rescued by an English vessel that was just passing by.

〔解説〕

- a. 船艇は之を女性として取扱ふが英語の慣用である。
 b. "The majority" は形に單數でも意味は無論復數であるからその動詞は "were" でなければならない。

(117) 彼の家族は最早彼は亡きものと諦めて居たのに彼が無事に歸つて來たので皆狂氣の如くなつて喜んだ。

〔誤譯〕 His family gave him up for lost, and was all mad with joy when he returned safe.

〔正譯〕 His family *who had given him up for lost*, *were* all mad with joy when he returned *safe* (and sound).

〔解説〕

- a. 「……と諦めて居たのに」を關係代名詞を用ひて繋いだ工夫に注意、同時にかくすればその「諦めて居たこと」はその「喜びしこと」よりも前なるを示す爲め動詞は *Past Perfect* にする。
 b. この場合の「家族は皆」は即ち「家族の人々は皆」であるから形は單數でも意味は矢張復數で、従つてその動詞は "were" でなければならない。

(118) その戦争に於て、騎兵の方は敗走したが歩兵の方は勝利を得た。

〔誤譯〕 In that war, the cavalry were routed, but the infantry were victorious.

〔正譯〕 *At the battle*, the cavalry *was* routed, but the infantry (*was*) victorious.

〔解説〕

a. 此處の「戦争」は例へば「奉天の戦争」「遼陽の戦争」など云ふ如く或る時或る場所に於ける合戦の意であるから“battle”としその前置詞は“at”である。“war”は「日露戦争」「歐洲戦争」の如く連続せる一戦役であつて其の中に幾多の“battle”がある道理である。

b. 本問の「騎兵」「歩兵」は各々一團體としての行動であるから形も意味も共に單數、従つてその動詞は“was”であるべき筈である。

比較:—

{ The cavalry wear red trousers. (騎兵隊の人々)
 { The cavalry was defeated. (騎兵隊の團體)

(119) 紙を一枚呉れ給へ、受取を書くのだから。

〔誤譯〕 Give me a paper, for I am going to write receipt.

〔正譯〕 Give me a sheet of paper, for I am going to write a receipt.

〔解説〕

a. “Paper”は物質名詞であるからこの儘數を表すことは出来ない。「幾枚」と云ふ時は是非〔正譯〕の如く

“sheet of”を前に附し、若しそれが「五枚」とか複數の場合には“five sheets of paper”と“sheet”の方を複數にする、同様に“a piece of chalk,” “a cup of water”。

b. 本問の「受取」は即ち「受取證」と一個の書類を示す普通名詞であるから冠詞を要する。

(120) 僕は蜜柑よりは林檎が好きだ。君は持つて居るなら僕に呉れ給へ。

〔誤譯〕 I like apples better than oranges. If you have them, please give them (to) me.

〔正譯〕 I like apples better than oranges. If you have any, please give me some.

〔解説〕

唯だ漠然と「持つて居る」ならさか「呉れ給へ」とか言つたからさて果して何れの林檎を幾個だか固より不明であるから“them (=the apples)”は不可である、宜しく疑問又は“if”の後には“any,”普通の肯定には“some”を用ふべきである (I. a. 参照)。

(121) 日本の家屋は大抵木であるから、火事の時は危険であるけれど、その代り地震の時は比較的安安全である。

〔誤譯〕 As most of the Japanese houses are of wood, they are dangerous at the time of fire, but, at the same time, they are comparatively safe at the time of an earthquake.

〔正譯〕 As most of the Japanese houses are of wood, they are dangerous at the time of a fire, but, at the same time, they are comparatively safe at the time of an earthquake.

〔解説〕

a. 「木である」は實は「木で造つてある」であるから本來は “are built of wood” で、文中 “built” は之を省くとするも “of” だけは是非添へて置かれなければならない。

〔類例〕

〔「僕のシャツはフランネルだ」〕
 My shirt is flannel. (誤)
 My shirt is of flannel. (正)

b. 「火事」を云ふ時の “fire” は普通名詞で “a” を附し、“fire” を言つただけでは單に「火」の意味である。

(122) 彼は今は大變勉強して居るけれど平素はそれ程勤勉でない。

〔誤譯〕 He is studying very much now, but he is not so diligence at other times.

〔正譯〕 He is studying very hard now, but he is not so diligent at other times.

〔解説〕

a. 「勉強する」に伴ふ副詞「大變」「よく」などは矢張「精出して」の義で “hard” である。

b. 「彼は勤勉である」は「彼は生徒である」即ち「彼=生徒」さはその趣を異にしその人の特種の性質に就て言つたものであるから、かゝる場合の「勤勉」は形容詞でなければならない。

〔類例〕

〔「彼は怠惰である」〕
 He is idleness. (誤)
 He is idle. (正)

〔「彼は貧乏である」〕
 He is poverty. (誤)
 He is poor. (正)

(123) あの人は二年前に米國に行きましたが今何處に居るか知りません。

(海兵 大正 5)

〔誤譯〕 He went to America two years before, but I do not know where he is now.

〔正譯〕 He went to America two years ago, but I do not know where he is now.

〔解説〕

a. 現在より溯りて「何年前」「何日前」等云ふ時の「前」は“ago”である(11. 参照)。

b. 単に「彼は今何處に居るか」と普通の疑問文ならばそれは主語と動詞とはその順序顛倒するが、本問の如く「彼は今何處に居るか知つて居るか」など、文法所謂附屬疑問句 (Dependent Interrogative Clause) の中に在つてはその順序は矢張普通の叙述文と同様である。

比較:-

{ Where is he now?
Do you know where he is now?

- (124) 私は彼の人から書物を二三冊借りて読みましたが、中々面白い物語がありました。(長高商 大正 2)

〔誤譯〕 I borrowed two or three books from him and read them, but there were some very interesting stories in them.

〔正譯〕 Borrowing two or three books from him, I read them and found some interesting stories in them.

〔解説〕

a. “I borrowed.....and——”は餘り冗長である、前の方は〔正譯〕の如く Participle を用ひて之を收縮し、後の方も“found”を用ふれば主語は前の“I”が共通で済む。

b. 本文中の「が」は単に前後二文を繋ぐのみで別に相反せる事柄を對應せしめたものでないから“but”ではない。

- (125) 次の日曜は何日ですか。二月十一日です。それでは祭日と日曜と重なりますね。

〔誤譯〕 What day is the next Sunday? It is the 11th of February. Then the national holiday and Sunday are piled up.

- [正譯] What day of the month is next Sunday? It is the 11th of February. Then the national holiday falls on (a) Sunday.

【解説】

- a. "What day" では「何曜日」を混する虞あつて不完全たるを免れぬ、宜しく「(何月)何日」は "What day of the month," 「何曜日」は "What day of the week" とすべきである。
- b. 現在を標準として「次の」即ち「この次の」と云ふ時の "next" には冠詞は不要、"the next" は過去又は未來の或る時を標準としそれより勘定して「その次の」と云ふ時に用ふ。

比較:—

- I shall see him next Monday.
 「(この) 次の月曜に彼に面會します」。
- I arrived on Sunday evening, and saw him the next Monday.
 「日曜日の夕方着いて、その次の月曜に彼に面會した」。

同様に現在より溯りて「(この)前の」と云ふ時の "last" には冠詞を要せず、冠詞を附せば「最後の」の意味となる。

比較:—

- I did not see him last Sunday.
 「この前の (=先週の) 日曜には彼に面會しなかつた」。
- I saw him on the last Sunday of last month.
 「先月の最後の日曜に彼に面會した」。

- c. "Are piled up" は「積み重なる」で當らない、本問の如き「重なる」は單に「祭日が日曜に當る」の心持で [正譯] の如く言ふ。
- d. かい場合の「日曜」は數多ある中の或る「日曜」と考へ不定冠詞を附してもよい。

(126) 私は今日の午後三時には此の本を讀み了へて居ませう。(東高師 33)

【誤譯】 I shall finish reading this book at three o'clock in the afternoon of to-day.

【正譯】 I shall have read this book by three o'clock this afternoon.

【解説】

- a. 「讀み了へて居ませう」は即ちその時迄に讀むと云ふ動作の完了せることを表すから "shall have read" と文法上所謂未來完了 (Future Perfect) を用ふべきである。

6. 「三時には」は即ち「三時迄には」であるから前置詞は “by” (81. 6. 参照)。

7. 「今日の午後三時」は、「今朝」即ち「今日の朝」を “this morning” と云ふと同様、單に “this afternoon” で宜しい (14. 6. 参照)。

- (127) 私はこの二月で丁度五年英語を學んだことになる。(神高商 大正 5)

[誤譯] I shall have studied English just for five years by this February.

[正譯] I shall have been studying English just for five years by February next.

[解説]

a. 「……學んだことになる」は單に未來の完了ではなく、その時迄ずっと動作が続いてさうして「五年」と云ふ月日が満了することになるから、單純なる *Future Perfect* では正確でない、宜しく [正譯] の如く文法上所謂 *Progressive Future Perfect* (進行形の未來完了) とすべきである。

- b. 「此の二月」と言へど實は「来る二月」であるから “this February” は不可である、但し [正譯] の如くせず “next February” の順序にしてもそれは差支へない。

- (128) 日本は風光を以てその名天下に高く歐米人にして観光の爲め來るもの年々増加す。

[誤譯] Japan is notorious with beautiful sceneries, and Europeans and Americans who come on account of seeing its sights increase every year.

[正譯] Japan is celebrated for its beautiful scenery, and Europeans and Americans who come to this country with the object of seeing its sights increase in number every year.

[解説]

a. 「名高い」にも色々あるが、“notorious” は例へば
He is a notorious ruffian.
「彼は名代の悪黨だ」。

さ云ふ風に普通悪い意味にのみ用ひ、本文の如き場合には當らない。

b. 「風光を以て」と言へばさて “with” ではない、凡て “famous,” “celebrated,” “noted,” “renowned,” “distinguished,” “eminent,” “notorious” など「有名な」と云ふ意味の形容詞の後に在る「……を以て」には常に

「……の爲めに」と理由を表す “for” を用ひ、その
○ 「……」と云ふ語の前には所有格の代名詞を附するが普通である。

〔類例〕

{ Tokyo is noted for its fires.
「東京は火事で名高い(火事が名物)」。

{ The Japanese are famous for their bravery.
「日本人は武勇を以て知らる」。

○ c. 同じく「景色」でも “sight” や “view” は或る地点よりの「眺め」で複数にもするけれど、“scenery” は一地方の全景を總稱する一種の集合名詞で常に単数である。

d. 原文には「来る」とのみあるけれど単に “come” だけでは英文としては不備である。

e. 「観光の爲め」の「の爲め」は目的を表すから “with the object of seeing,” “with the intention of seeing,” “for the purpose of seeing” 乃至単に “(in order) to see” などいすべく、“on account of” は例へば

{ I could not go there on account of illness.
「病氣の爲め行くことが出来なかつた」。

と云ふ風に原因を示して此處には當らない。

○ f. 邦文には単に「……するもの増加す」とあれど、之を英文に譯する場合には

the number of Europeans and Americans.....increases every year.

乃至〔正譯〕の如く

Europeans and Americans who.....increase in number every year.

と敷衍する必要がある。

(129) 千葉醫學専門學校の新學期は九月十一日からです。(千醫 37)

〔誤譯〕 The new term of Chiba Special Medical School is from the 11th of september.

〔正譯〕 The new term of the Chiba Special Medical School begins (or commences) on the 11th of September.

〔解説〕

a. 學校の如き公共の設立物の名は固有名詞でも猶ほ常に定冠詞を附す(69. a. 参照)。

○ b. 「……からです」とあれど實は「……から始まります」であるから〔正譯〕の如くする必要がある、尙ほ「から」に對し “on” を用ふるに就ては 30. c. 参照。

c. 月の名や、七曜の名は一種の固有名詞で常に *capital letter* を用ふ。

130) 長男には死なれ、家は焼くし、ひどい目に遭ひました。

〔誤譯〕 I was died by my eldest son, burnt my house, and had a hard time of it.

〔正譯〕 I had a hard time of it, *having* my eldest son *die* and my house *burnt down*.

〔解説〕

a. 「長男に死なれ」と云ふものゝ之は實は「長男が死んだ」と單に出來事として述べる代りに自己の經驗として言つたもので、こんな場合には〔正譯〕の如くするが普通である。文中“*die*”は實は *Infinitive* の“*to*”を省いたもので、此の構文に於ては常に之を省く。“*To die*”は自動詞であるから“*was died*”など云ふ形は無い。

比較:—

{His father *died* last year.
He *had* his father *die* last year.

但し「死なれた」は即ち「失つた」であるから之は“*having lost my eldest son*”としても可い。

b. 例令原文が「家は焼くし」とあつたからさて“*burned my house*”では故意に自ら焼いたことになる、所謂火事に遭つたを云ふ時は單に一個の出來事とすれば

My house was burnt down.

で、之を自己の嘗めし經驗に引き直す。

I had my house burnt down

となる。そこで諸君は定めし氣が附かれたであらうが、前の「長男に死なれた」と云ふ時は“*had*”の後には“(to) *die*”と *Active* を、此の「家が焼けた」には“*burnt down*”と *Passive* を用ひてある。之は何故であるかと言ふに前者は即ち「長男が死ぬる」で“*die*”は何處までも自動詞で (*Active*) である筈であるけれど、後者は家の立場から言へば實は「火事の爲めに焼かれた」であるからそれで之はかく *Passive* にするのである。

それからかかる場合の「焼けた」は特別の斷り無き限りは全焼の心持で通例“*down*”を附ける。

〔備考〕

“*Having.....*”と文法上所謂 *Participle* (分詞) を用ひて後へ廻したのは、かくして以て文を收縮して簡潔にしたものである。それから“*had a hard time of it,*”は一の慣用句で、文中“*it*”は漠然とその事柄を指す。

思へば "the newspapers (which) they publish in Osaka" とすることも出来る、此の場合 "they" は言はゞ漠然と新聞發行者を指す。

〔類例〕

{ 「あの學校では英語を教える」。
English is taught in that school.
They teach English in that school.

d. 「其の日の中に」は即ち「(發行を)同日中に」の意であるから〔正譯〕の如く敷衍する必要がめらうと思ふ。

① (133) 彼は父親は無く、母と二人賃仕事して漸くその日を送つて居る。

×〔誤譯〕 He has not a father, and just manages to live from hand to mouth by doing job work with his mother.

✓〔正譯〕 He has no father, and just manages to live from hand to mouth by doing job work with his mother.

〔解説〕

○ "There is....." "I have....." "He has....." などに伴ひ「.....が有る」「.....が無い」と物の有無を表す時

の「.....が無い」には普通 "not a....." の形は用ひずして "no....." の形を用ふ。

比較:-

{ It is not a post-office, but a bank.
「郵便局ではない、銀行だ」。(非)
There is no post-office in this town.
「此の町には郵便局はない」。(無)

但し特に力を入れて單に「.....が無い」の代りに「.....は一つも無い」さか、又は「.....でない」の代りに「.....でも何でも無い」「.....なものか」など云ふ時は、此の用法を逆にして却つて前の場合に "not a," 後の場合に "no" を用ふ。

比較:-

{ There is no one to be seen in the street.
「通りには誰も見えない」。
There is not a soul to be seen in the street.
「通りには人つ子一人見えない」。

He is not a scholar, but a politician.
「學者ではない、政治家である」。
He is no scholar; he has no learning.
「學者なものか; 學問などは少しも無い」。

× (134) 近頃は上流の社會のみならず下等社會まで奢侈に耽る傾がある、だから勤儉の風を奨励するが目下の急務である。

(專檢 大正 5)

【誤譯】 There is a tendency not only in the high society, but also in the low society nowadays to be absorbed in extravagance. Therefore to encourage the habit of diligence and economy is the pressing need of the present time.

【正譯】 There is a tendency not only in the higher (or upper) classes, but also in the lower (classes) nowadays to be addicted to extravagance. It is, therefore, the pressing need of the (present) moment to encourage the custom of diligence and economy among them.

【解説】

a. 「上流社會」「下等社會」など、「上の方」と「下の方」、「大きい方」と「小さい方」を云ふ風に物を二つに分けて言ふ時は常に比較級を用ふ。

{ He is the better scholar of the two.
○ 「二人の中では彼の方が學問が出来る」。

それからかく「何々社會」と社會の一階級に就て云ふ時の「社會」には“class”を用ひ、且常に複數にする。

【類例】

The middle classes [中流社會]; the working classes [労働社會]。

b. 同じ「……に耽る」でも“to be absorbed in……”は、例へば

{ He is absorbed in reading.
【彼は讀書に耽る】。

の如く熱中するの意味で此處には當らない。

c. “To encourage……is”を云ふ風に Infinitive を文の劈頭に出して之を主語とするよりは寧ろ【正譯】の如く“it”を用ひて形式上の主語とし眞の主語たる Infinitive は之を後に廻すが常である、本文の如くその Infinitive に附隨せる文句の長い時には特にさうである。

比較:-

{ It is wrong to tell a lie.
【To tell a lie is wrong.】

d. “Therefore”は【正譯】の如く普通文の中に挿む。

e. “The (present) moment”は所謂「刻下」で、極めて強き言ひ方である。

○ f. "Habit" は「個人の習慣」即ち「癖」であるから當らない、此處には「風習」の意味なる "custom" を用ふべきである。

○ g. 原文には單に「勤儉の風を奨励する」とあるけれど、之は英語としては "among them" 「彼等(即ち上流、下等社會の人々)の間に」と敷衍する必要がある。

○ (135) 書物を有して居る人は澤山あるが、之を利用する道を知つて居る人は極めて少ない。(東高商 43)

〔誤譯〕 There are many people who have books, but there are very few people who know how to make the most of them.

〔正譯〕 Many people have books, but very few people know how to make the most of them.

〔解説〕

○ 「……する者が多い」「……する者が少ない」など云ふ時は "There are……" の形は用ひずして〔正譯〕の如くするが英文としては普通である。

○ (136) 境遇に支配せられぬ人は世間にいくらかも無さうである。(七高 43)

〔誤譯〕 It seems to me that very few people in the world are not controlled by their circumstances.

〔正譯〕 It seems to me that there are very few people in the world who are not controlled by their circumstances.

〔解説〕

○ (135) と反對に「……せぬ者が多い」「……せぬ者が少ない」と否定に言ふ時は〔正譯〕の如く常に "There are……" の形を用ふ。

○ (137) 彼は八つから小學校へ入學して此春十三で卒業した。

〔誤譯〕 He entered into a primary school from eight years and graduated from it at thirteen years in this spring.

〔正譯〕 He entered a primary school at eight years of age and completed its school course at thirteen years of age last spring.

〔解説〕

a. 「八つから」とは實は「八歳で」であるから〔正譯〕の如くでもする必要があらう。

b. "To enter a room," "to enter a school," "to enter a hospital" 「入院する」など云ふ時の "to enter" は英語では他動詞でその次に前置詞は不要。

c. "To graduate" は本来「卒業して學位を得る」の義であるから大學等の如き高等専門の學校に關して用ふべく、程度の低い學校の場合には〔正譯〕の如く「……の課程を修了する」の形を用ふる方がよい。

d. 「此の春」は云ふものゝ實は今から言へば過去で「此の前の春」であるから〔正譯〕の如くする。

(138) 僕は病氣の爲め先日の同窓會には出席することが出来なかつたが、定めし盛會であつたでしょう。

〔誤譯〕 I could not present to the alumni's society of the other day for illness, but it must have been a great success.

〔正譯〕 I could not $\left\{ \begin{array}{l} \text{be present} \\ \text{present myself} \end{array} \right\}$ at the alumni's meeting the other day on account of illness. It must have been a great success.

〔解説〕

a. 「……に出席する」の「に」は "at" で、「……に缺席する」の「に」は "from" なること(56 参照)、及び動詞 "present," "absent" を用ふる時にはその次に文法所上謂反射代名詞 (Reflexive Pronoun), 即ち "—self" の形の代名詞を置くを要することに注意。

比較:—

$\left\{ \begin{array}{l} \text{I was present (形容詞) at the meeting. 「出席」} \\ \text{I was absent (形容詞) from the meeting. 「缺席」} \\ \text{I presented myself (動詞) at the meeting. 「出席」} \\ \text{I absented myself (動詞) from the meeting. 「缺席」} \end{array} \right.$

b. 原文は「先日の」になつて居れど英文では前に "of" を附せずして單に「先日同窓會には……」を云ふ風に之を一種の副詞とし譯することに就ては(30) 参照。

c. 「病氣の爲め」の「……の爲め」は原因、理由を表すから "on account of," "because of," "owing to," "through" などいすべく、「……の利益の爲め」と目的を表す "for" では此の場合勿論不可である。

〔參考〕

I think of going away somewhere for (the sake of) my health.

「保養の爲め何處かへ行かうかと思つて居る」。

(139) 容易く分るやうな本を読むやうにせよ。餘り六つかしい本を読もうとするは害有つて益無きことである。

〔誤譯〕 Read such books which you can understand with ease. It does you more harm than good to try to read too difficult books.

〔正譯〕 Read such books *as* you can understand with ease. It does you more harm than good to try to read too difficult books.

〔解説〕

“Such……”は〔正譯〕の如く“*as*”と相對せしむべく、然らずんば寧ろ“*such*”を“*those*”に變じて“*those books which……*”とせよ。】

(140) 山田太兵衛と云ふ東京の生絲商が信州の片田舎を旅行して居たら、追剝に出くはして金を皆取られたと云ふことが今日の萬朝報に出て居る。

〔誤譯〕 It is reported in *Yorozu Chōhō* of to-day that a raw-silk merchant Tabei Yamada by name, while he was travelling through a lonely part of Shinano, fell in with some footpads and all his money was robbed.

〔正譯〕 It is stated in *to-day's Yorozu Chōhō* that a raw-silk merchant Tabei Yamada by name, while (he was) travelling through a lonely part of Shinano, fell in with some footpads and was robbed of all his money.

〔解説〕

a. 「何月何日の何々新聞」と云ふ時はその「何月何日」と時を表す名詞は所有格となり得ることに注意。

〔類例〕

「前の月曜日の官報」*Last Monday's* (issue of the) *Official Gazette*; 「昨日の書取」*yesterday's dictation*; 「去年の收入」*last year's income*; 「明日の課業」*to-morrow's lessons*.

b. "Rob," "deprive," "strip," "bereave," "cheat,"
"defraud" など物を奪取又は騙取する意味の動詞は、
例へば

「彼は僕の金を奪った。」
He robbed me of my money.

即ち先づ「誰の(金)を奪ったか」「僕の(金)を奪った」
と奪はれし人を示し、然る後然らば「僕の何を奪った
か」「僕の金を奪った」とその奪はれし物は "of" を附
してその後に置く。従つて之を *Passive* に變ずれば

I was robbed of my money (by him).

となる譯である。

(141) 直譯は英文和譯に於けるよりも和文英
譯に於て殊に避くべきものなり。

(長高商 大正 5)

[誤譯] Literal translation should avoid in
translating Japanese into English more
than in translating English into Japanese.

[正譯] Literal translation should be avoided
in rendering Japanese into English more
than in rendering English into Japanese.

[解説]

a. 本文の「避くべきもの」は實は「避けらるべきもの」であるから [正譯] の如く *Passive* にすべきである。尤も本文は "you," "we," "one" など所謂不定の意味の語を主語とし

You should avoid literal translation.....

と云ふ風に *Active* にすることも出来る。

b. "Translating" でも決して不都合は無けれど前の
"translation" に對し同じ様な語が重なる故變化の爲め態を "rendering" としたのである。

(142) 倫敦發電によれば青島の陥落は彼の地
にて非常なる熱誠を以て迎へられし由。

[誤譯] According to a telegram from London, it is said that the news of the fall of Tsingtao were received there with great enthusiasm.

[正譯] According to a telegram from London, the news of the fall of Tsingtao was received there with great enthusiasm.

*goney master
subson picture*

【解説】

ボム
国
赤
流
音
文

a. かく「……によれば」を “according to……” を以て譯する場合には原文中後に在る「—の由」「—ださうな」「—と云ふことだ」などは英文としては別に之を取り立て、譯する必要の無いことに注意。但しこの「倫敦發電によれば……」など云ふ形は上の

- (イ) According to a telegram from London, ... とする外
- (ロ) A telegram from London says (or reports) that.....
- (ハ) A London telegram (or message) says that.....
- (ニ) A London despatch states that.....
- (ホ) London wires (打電す) that.....

など様々に譯することも出来る。

○ a. “News” は形は一見複数の如きも實は単数であつて常に単数として取扱はる。

【参考】

III news runs apace.
「悪い報知は速く弘まる(悪事千里)」。

No news is good news.
「便りの無いのは好い便り」。

(143) 王は假令太陽西より出で鴨綠江逆流すとも朝貢を怠らじと云つた。

【誤譯】 The King said that he will never fail to pay tribute to our country even if the sun had risen from the west and Yalu River had run upstream.

【正譯】 The King said that he would never fail to pay tribute to our country even if the sun were to rise in the west and the Yalu River were to run upstream.

【解説】

○ a. 未來のことは固より現在より確かにかうと断定することは出来ないけれど、昨日も昨年も否十年百年千年の昔も太陽は常に東より出で鴨綠江の水は上より下へ流れて居たから、將來に於ても矢張太陽は東より出で鴨綠江は下へ流ると断定しても先づ差支は無からうと思ふ、つまり本文は言はゞ未來の事に関する一個の純然たる假定に過ぎないので、かゝる場合には【正譯】の如く “were to……” の形を用ふるが本式である。

○ b. それから上の如く過去を以て示せる一の假定を受くる結果の句は亦 “would,” “should” などの矢張過去形にするが原則である。 S.P.

【備考】

NO かく純然たる假定及び之に對する結果を表す句に在りては假令前に “said” などの過去の動詞があつてもそ

影の影響を受けて "would have failed" とならず依然として原形を存することに注意。sun ^{sun} ^{night} ^{sun}

〔類例〕

櫻の枝

He said "I would buy it if I were rich."
= He said that he would buy it if he were rich.
「彼は金持であつたらそれを買ふのだに云つた。」

4. 「西より出で」とあつても矢張「西に出で」の心持で前置詞は "in" なることに注意。

〔参考〕

「太陽は東より出で、西に没す。」
The sun rises *in* the east and sets in the west.

(144) 君はその櫻の枝を何處で折つたかね。
九段から此處へ来る途中で折つたのだらう。

〔誤譯〕 Where have you broken off that branch of a cherry-tree? You must have broken off it on the way from Kudan to here.

〔正譯〕 Where did you break off that branch of a cherry-tree? You must have broken it off on your way here from Kudan.

〔解説〕

a. 實際の事情より察すれば無論「折つた」と云ふと同時に當人はその櫻の枝を持つては居るだらうけれど、さりて本文に於ては今それを持つて居るか居ないかを表すが主眼ではなく、「何處で折つたか」とそれを折つた場所を示すが目的であるからこんな場合には普通の過去を用ふ。

b. 同じ「……を折(り)取つた」でも前の場合は "break off that branch" でよいけれど、後の場合には "broken it off" なることに注意。凡て "to break off," "to take off," "to put off," "to put away," "to put on" など "off," "away," "on," "up" などの副詞を合して成れる動詞はその Object が名詞なる時は之を最後に置くけれど、若しそれが代名詞なる時は之をその中間に挿むと云ふが習慣である。

比較:—

{ Put away the things. (名詞)
Put them away. (代名詞)
「それを片附けよ。」

c. "On your way" と代名詞の所有格を用ふるに就ては 95 参照。

d. かいの場合 “from Osaka to Tokyo” などに準じ “from Kudan to here” とするは學生普通の誤であるけれども、“here” は即ち “to this place” で、かの「此處へ來い」を單に “Come here.” 「其處へ行け」を單に “Go there.” と云ふと同様その前に何等前置詞を附せずして之を “on your way” の直ぐ後に置くことに注意。

(145) 上野の櫻は今が満開です。花は今度の日曜日迄は持ちません。

〔誤譯〕 The cherry-flowers of Ueno are in full blossom now. They do not keep till next Sunday.

〔正譯〕 The cherry-flowers *at* Ueno are in full bloom now. They *will not keep* till next Sunday.

〔解説〕

- a. 「上野の櫻」と言へどこの「の」は實は小さき場所を示すから矢張 “at” とすべきである (97. a. 参照)。
- b. 「満開です」には “to be *in full blossom*,” “to be *in full bloom*” 兩様あるけれど、前者は普通「樹」に就て言ひ後者は「花」に就て言ふ。

比較:—

{ The cherry-flowers are in full bloom.
The cherry-trees are in full blossom.

c. 原文は成程形は「持ちません」と現在になつて居れど事は未來に關するを以て矢張 “will not keep” と未來にすべきである。

(146) 僕は英語の試験には満點を取つたけれど、代數の試験には丸で失敗した。

〔誤譯〕 I have got full marks in the examination of English, but I have made an utter failure in the examination of algebra.

〔正譯〕 I have got full marks in the examination *in* English, but I have made an utter failure in the examination *in* algebra.

〔解説〕

「……の試験」と云ふ時の「の」には “in” を用ふるが正確である。

比較:—

{ An examination *in* chemistry. 「化學の試験」。
An experiment *on* electricity. 「電氣の實驗」。

(147) 先夜伊藤君の内に這入つた強盗は二十四時間経たぬ内に捕まつた。だからしてその強盗は未だその取つた物を處分する暇が無かつた。

[誤譯] The burglar who entered Mr. Ito's the other night was captured within twenty-four hours. So he had not spare time to dispose of his plunders.

[正譯] The burglar who had broken into Mr. Ito's house the other night was captured within twenty-four hours. So he had no time to dispose of his plunder.

[解説]

a. 盜賊の這入るは決して唯の "to enter" などではない、強盗なら「押入る」の心持で "to break into," 所謂コソ泥棒なら「忍び込む」の心持で "to steal into" を用ふべきである。

b. それからその強盗の這入つたのは無論その捕まつたよりは先であるから、之を明瞭に示す爲めに「這入つた」と云ふ方はかく *Past Perfect* にすべきであらう。

c. 成程

「僕は彼に伯父の所で會つた。」

など云ふ時は單に

I met him at my uncle's.

と言ひてその後に附すべき "house" を省く (110. 参照) けれど、それは言はゞ特別の場合でその筆法をこんな場合にまでも應用することは出来ない。

d. 「……を持たぬ」「……が無い」などい "have," "(There) is" などに伴ふ打消には通常 "not any" の心持で "no" を用ふ (113. 参照)。

e. 本文の如き場合の「暇」は所謂「餘暇」の義なる "spare time" などそんな呑氣な意味ではない、それ丈の「時間」が無いの心持で單に "time" とすべきであらう。

f. "Plunder" は一種の集合名詞で常に單數である。

(148) 君は何時歸つて來られるです。

遅くも一週間後には歸つて來ます。

[誤譯] When shall you come home?

I shall be back after a week at the latest.

[正譯] When shall you come home?

I shall be back in a week (or in a week's time) at the latest.

【解説】

✓「一週間後に」は即ち「一週間経てば」であつて、そしてかく未來の事に関する「経てば」には決して“after”は用ひない。

比較:—

{ I shall return *in* a week. 「経てば」。
 { I returned *after* a week. 「経つて」。

(149) 此の部屋は僕の部屋より三倍も廣くて大層居心地が好い。

【誤譯】 This room is very comfortable, being three times wider than mine.

【正譯】 This room is very comfortable, being three times *as large as* mine.

【解説】

● 部屋などの廣いは“large”を謂ふ、それから成程「此の部屋は僕のより廣い」

は

This room is *larger than* mine.

だけれど、「……の何倍」と云ふ時には比較級の形は用ひずして【正譯】の如くするが本則である。

【類例】

{ 「此の木は其の木の倍高い」。
 { This tree is *twice as tall as* that (tree).

(150) 向ふに高帽を冠つて居る若い紳士は誰ですか。私は顔は知つて居ますけれど、名は知りません。

【誤譯】 What is the young gentleman who puts on a tall hat over there? I know his face, but I do not know his name.

【正譯】 Who is the young gentleman { *with*
 in
 a tall hat *on* } over there? I know *him*
 a tall hat } *by sight*, but (I do) not (know him) *by*
name.

【解説】

✓ a. 「高帽を冠つて居る」など状態を示す時“to put on”は當らない、之は「帽子を冠る」「着物を着る」など一時の動作を述ぶる時に用ひ、之に對し「冠つて居る」「着て居る」と自ら繼續的の状態を示すには通例“to have on”の形を用ふ。

比較:—

{ He *put on* a tall hat.
 「彼は高帽を冠つた」。(動作)
 { He *had on* a tall hat.
 「彼は高帽を冠つて居た」。(状態)

そこで「高帽を冠つた若い紳士」即ち「高帽を冠つて居る若い紳士」は “a young gentleman *who has on* a tall hat,” そしてその “*who has*” を前置詞 “*with*” に縮めると同時に “*on*” は更に之を後に廻して “a young gentleman *with* a tall hat *on*” となる、但し此の “*with**on*” の代りにかの

He was *in* foreign clothes.

「彼は洋服を着て居た。」

など服装を示す “*in*” を用ひ、“a young gentleman *in* a tall hat” とすることも出来る。

比較:

{ He *had on* Japanese clothes.
He *was in* Japanese clothes.
「和服を着て居た。」

{ He sat reading *with* spectacles *on*.
He sat reading *in* his spectacles.
「眼鏡を掛けて坐つて本を讀んで居た。」

あ。「顔は知つて居る」など云ふ時は〔正譯〕の如く云ふが普通である、同様に「名は知らぬ」も “I do not know his name” でも無論誤ではないけれど “*by sight*” に對し “*by name*” と云ふ言ひ方があるから記憶して置くがよからう。】

(151) あれは全くの無學文盲でイロハも碌々讀めもせねば書けもせぬ。

〔誤譯〕 He is utterly ignorant and unlettered, and can not even read and write his alphabet properly.

〔正譯〕 He is utterly ignorant and unlettered, and cannot even read or write his alphabet properly.

〔解説〕

“Cannot read and write” では「讀むこと書くこと(兩方)は出来ない(一方だけしか出来ない)」と云ふ様にとれる、「双方出来ない」と云ふ時は宜しく “not (*either*).....*or*” 又は “*neither*.....*nor*” の形を用ふべきである。

(152) 父は目下東北地方旅行中で今月末でなければ歸りません。

〔誤譯〕 My father is travelling in the north-eastern parts at present and will not come home unless it is the end of this month.

〔正譯〕 (My) father is travelling in the north-eastern parts at present and will not come home *before* the end of this month.

〔解説〕

「何時々々でなければ.....せぬ」は即ち「何時々々前に

は……せぬ」「何時々迄は……せぬ」であるから “not...before” 又は “not...till” の形を用ふべきである。

(153) 前で人を賞める様な人間は信用するな、そんな人は陰では悪口を言ふに極めて居るから。

〔誤譯〕 Do not trust such men who praise you to your face, for they are sure to speak ill of you behind your back.

〔正譯〕 Do not trust such men as praise you to your face, for they are sure to speak ill of you behind your back.

〔解説〕

「……するやうな人」を云ふ時前に “such” を用ひたならば之を相對するものは “as” であつて “who” ではない。

(154) 此處に大層面白い本があるが、誰でも欲しい者に呉れよう。

〔誤譯〕 Here is a very interesting book. I will give it to whomever wants it.

〔正譯〕 Here is a very interesting book. I will give it to whoever wants it.

〔解説〕

成程前置詞 “to” に對してはその目的格たる “whomever” で宜しいやうであるけれど、かゝる場合にはその前の方との關係如何は少しも顧るこゝなくして唯だ後の方の關係のみを考へ、若し後の方との關係に於てそれが主格たるを必要とせば主格、所有格たるを必要とせば所有格、目的格たるを必要とせば矢張目的格とするのである。即ち本文の如きも後の方は “wants” なる動詞に對する關係上矢張その主語として “whoever” としなければならない。亦實際かゝる場合この “—ever” の形を用ふるこゝを止めたますればその關係は直ぐ分る、即ち上例の如きも “—ever” の形を用ひないますれば是非

I will give it to any one who wants it.

さしなければなるまい、つまり後の方關係代名詞の格は矢張是非 “who” を主語にしなければなるまい。“—ever” の形にした時も矢張之と同様で若し後に “who” を要せば “whoever,” “whose” を要せば “whosever,” “whom” を要せば “whomever” とするのである。

(155) 日本では雨季は通例六月の十日又は十一日に始まり七月の十日頃に終る。

〔誤譯〕 In Japan, rainy season begins on the 10th or 11th of June and ends on about the 10th of July generally.

〔正譯〕 In Japan, *the rainy season generally sets in on the 10th or 11th of June and ends (on) about the 10th of July.*

〔解説〕

- a. 「雨季」「乾燥季」など云ふ時は “*the rainy season,*” “*the dry season*” などに定冠詞を附す。
- b. *Generally, always, rarely, seldom, often* などは通例常に動詞の前に置く。
- c. 「雨季が始まる」は即ち「雨季に入る」で、こんな場合には通常〔正譯〕の如く “*to set in*” なる熟語を用ふ。

〔類案〕

{ The cold weather sets in.
「寒に成る」。

{ Winter sets in about December in England.
「英國では冬は十二月頃に來る」。

〔156〕 此邊に文房具店はありますか。

ハイ、あります。此角を曲つて一丁ばかり行くと左側にあります。

(東高商 大正 5)

〔誤譯〕 Isn't there any stationer's store hereabouts?

Yes, there is. If you turn this corner and go about one *chō*, there is on the left.

〔正譯〕 *Don't you know of any stationer's hereabouts?*

Yes, *I do*. If you turn this corner and go on about one *chō*, you will find one on the left.

〔解説〕

a. 「……はありますか」は “*Isn't there……?*” でも誤さ云ふ程ではないけれど、“*Don't you know of……?*” 「……のあることを御承知ではありませんか」「……の御心當りはありますか」の婉曲なるに如かない。

b. 「文房具店」など云ふ時の “*store*” は通例之を省く(110. 参照)。

c. “*I do*” としたのは前の “*Don't you know of……?*” に對する自然の結果で “*I know of one (=a stationer's)*” の略である。又假に前の “*Isn't there……?*” をその儘存するにしても單に “*there is*” では不備である、是非 “*there is one (=a stationer's)*” とはする必要があらう。

d. 此處の「行く」は「前へ進み行く」の心持で “go on” とするがよからう。

e. 「……して見るゝ何々がある」と云ふ時は〔正譯〕の如く “you will find” の形を用ふるが宜しい。それから “find” の次に “one (= a stationer's)” は無論必要である。

(157) あの男の子は父よりも母に似て居るが、母に似て居る子は果報だと云ふことです。

〔誤譯〕 That boy is resembling to his mother more than his father, but boys who are resembling to their mothers are said to be fortunate.

〔正譯〕 That boy resembles his mother more than his father. Those who take after their mothers are said to have been born under a lucky star.

〔解説〕

a. 「似て居る」「違つて居る」など云ふことはさう時々變化するものではなく、似て居れば何時までも似て居り、違つて居れば何時までも違つて居るゝ自ら繼續的

の状態を表すから “resemble” や “differ” に進行形は無い。單に “resemble(s),” “differ(s)” で「似て居る」「違つて居る」となるのである。

b. 「母に似て居る子」は “boy” や “resemble” が直ぐ前にあるので、單に變化の爲め態を〔正譯〕の如くしたのである。

c. 「果報だ」は單に “to be fortunate” でもよけれど、前の “those who take after their mothers” の句が比較的長いから唯だそれと釣合を取る爲めに稍長き “to have been born under a lucky star” 「幸福な星の下に生れた」と云ふ句を用ひたのである。

(158) 獨逸國民が國の爲めに戦ひつゝある精神を最も能く了解し得るものは唯だ日本國民のみであると本邦に在住する一獨逸人は云つて居る。(小高商 大正 5)

〔誤譯〕 A German who resides in this country says that those who can best understand the spirit the German are fighting for their country are only the Japanese.

〔正譯〕 A German *residing* (or A German *resident*) in this country says that the Japanese *alone* can *fully* understand the spirit *in which* the Germans are fighting for their *fatherland*.

〔解説〕

a. 「本邦に在住する一獨逸人」に對し “A German who resides in this country” は稍冗長である、寧ろ〔正譯〕の如く縮めて “A German residing in this country,” “A German resident in this country” 「本邦に於ける一獨逸居留民」とするの簡潔なるに如かない。

b. 「……するものは唯だ日本國民のみである」を原文の順序通りに “those who……are only the Japanese” などするは全然英語の慣用に反す。かの

「語學を學ぶ方法は熟練のみ」。

など云ふ時

Practice is the only way to learn a language.

と「のみ」は却て「(語學を學ぶ)方法」の方に附けると同じ筆法で、“the Japanese are the only nation (or people) who……” とするか、或は更に之を縮め且意味を強くして〔正譯〕の如く “the Japanese alone……” とすべきである。

c. 原文が「最も能く了解し得る」でも “can best understand” では何だか面白くない、寧ろ “best” を “fully” とするか、或は單に “can appreciate” 「眞に了解し得る」とでもする方が宜からうと思ふ。

d. 「獨逸國民が國の爲めに戦ひつゝある精神」に對し〔誤譯〕の如くではその “the spirit” と後の文句との連絡が取れない、是非〔正譯〕の如く「(精神それに於て)獨逸國民が國の爲めに戦ひつゝある精神」とすべきである。但しこの場合 “in which” を往々 “with which” とする人があるけれどそれは宜しくない。

〔類例〕

It depends on the spirit in which it is done.

「それはその之を爲す精神如何に依る」。

e. 成程 “A Frenchman” の複数は “Frenchmen,” “a Chinaman” の複数は “Chinamen” であるけれど、さりさて “A German” の複数も亦 “Germen” とは行かない、“German” は元 “Germany” の變化でつまり語尾の “—man” は偶然「人」と同じ綴になつて居ると云ふ丈けのこゝ、前の “A Frenchman” や “A Chinaman” などは全然その趣を異にして居るのである。

f. “Fatherland” 「祖國」とは唯だ變化の爲めかくしたので、矢張 “country” としたとて決して不都合は無いのである。

- (159) どれ程勉強したとて一年や二年で外國語を我物にすることは出来ない。

(陸經 大正 5)

〔誤譯〕 However hard you may study, you can not possess yourself of a foreign language in one year or two.

〔正譯〕 However hard you may study, you can not master a foreign language in
 { a year or two.
 { one or two years.

〔解説〕

a. 此處の「我物にする」は「占有する」の意味ではなくして、「會得する」「精通する」の意味であるから“master”とすべきである。

〔参考〕

He possessed himself of that fine estate.
 「彼はその立派な身代を我物にした」。

b. “One year or two” の不可なるに就ては 55. 参照

- (160) 獨逸はその軍國主義を實行してその版圖を擴張することさへ出来るならば敢てその手段は撰ばない。

〔誤譯〕 Germany is indifferent to the means if only it can carry its militarism into practice and extend its territory.

〔正譯〕 Germany is indifferent to the means so that (or provided that) she can carry her militarism and extend her territory.

〔解説〕

a. 「……でさへあるならば」には“if only” 以外に“so that,” “provided that” なる慣用句のあることに注意。

b. 國名は單に地理上の一國土としては無論中性であるけれど、之を活動ある一國家と視る時は女性とする。

比較:—

Japan is but a small country. It consists of four principal islands, and its climate is generally mild.

「日本は單に一小國に過ぎない。それは四箇の主なる島より成り、その氣候は一般に溫和である」。(單に國として)。

If Japan strengthens her navy a little more, she may be able to protect her interests abroad.

「若し日本にして今少しその海軍を強くしたら、その外國に於ける利益を保護することが出来よう」。(一國家として)。

- (161) 一昨日私が將に停車場を去らうとして居ました時其二三日前名古屋で逢ひました五人の支那人に出會ひました。

(蠶講 41)

[誤譯] On the day before yesterday when I was about to leave the station, I saw three Chinamen whom I met at Nagoya a few days ago.

[正譯] *The day before yesterday* when I was about to leave the station, I saw three Chinamen whom I *had met* at Nagoya a few days *before*.

(解説)

- a. "The day before yesterday," "the night before last" 「一昨夜」などには "yesterday," "to-day," "to-night" などと同じく前置詞は不要 (9. 参照)。
- b. 「停車場を去らうとして居た」ことが既に「一昨日」と一つの過去であるのにその「名古屋で會つた」ことは「(尙)其二三日前」を云ふからには此の方は當然 *Past Perfect* とすべきである。
- c. 「一昨日」を云ふ一つの過去より溯りて更に「其二三日前」であるから "before" としなければならない (11. a. 参照)。

- (162) 僕は誤つて仙臺行きの瀛車に乗り大宮へ来て始めてそれと氣が附いた。

[誤譯] I took the train which went to Sendai by mistake and became aware of the fact for the first time when I arrived at Ōmiya.

[正譯] I took the train *for* Sendai by mistake and *did not* become aware of the fact *till* I arrived at Ōmiya.

(解説)

- a. 「何處其處行きの瀛車(又は瀛船)」など云ふ時の「行きの」には單に前置詞 "for" 一語で宜しい。

(参考)

{ My brother *left for* Sendai yesterday.
「兄弟は昨日仙臺へ立ちました」。

{ These goods are *destined for* Russia.
「此の貨物は露西亞行きです」。

{ The ship is *bound for* Hongkong.
「この船は香港行きです」。

b. 單に

「僕はあの時始めてあの人に會つた」
など云ふ時は

I met him then *for the first time*.

と “for the first time” でよけれど、「何々して始めて……した」と動詞二つを繋ぐ時は英語では “not……till—” 即ち「何々する迄は……しなかつた」と裏から云ふが常である。

〔類例〕

{ 「朋友は離れて居て始めてその有難さが分る。」
We do *not* know the blessing of our friends *till* we become separated from them.

- (163) 彼は明治四十二年始めて京都より代議士に選挙せられた。

〔誤譯〕 He was elected a member of the Diet from Kyōto in the 42th year of Meiji for the first time.

〔正譯〕 He was elected *member* of the Diet for Kyōto in the 42nd year of Meiji for the first time.

〔解説〕

○ 「……に任命せられた」「……に叙せられた」「……に選挙せられた」など云ふ語に伴ふ官職又は稱號を表はす語はその冠詞を省く云ふが文法の定則である。

〔類例〕

{ Washington was twice elected *president*.
「ワシントンは二度 大統領に選挙せられた。」

{ Our principal has resigned. Who do you think will be *appointed principal* in his place.

{ 「校長が辭職したが。後任者は誰でしょうね。」

○ { By special grace, he was *created baron*.
「特旨を以て 男爵に叙せられた。」

- 〆 「……より代議士に選ばれた」「……選出の代議士」と云ふ時はその地方を代表する心持で常に “for” を用ふ。

〔類例〕

「神奈川県選出の代議士」

- A member of the Diet (elected) *for* Kanagawa prefecture.

○ 〆 「第四」より上か “fourth,” “fifth,” “sixth”、従つてその略が “4th,” “5th,” “6th” となるより「第一」「第二」「第三」も亦之に準じて “1th,” “2th,” “3th” とするは學生の往々爲す誤の一である、けれども「第一」「第二」「第三」は本来 “first,” “second” “third” であつて語尾に “-th” などは少しも無い、だからして自然 “1th,” “2th,” “3th” など云ふ形もあらう筈が無く、矢張語尾の二字を取つて “1st,” “2nd,” “3rd” とすべき筈である。

- (164) 英語の口語と文語との差は日本語程は甚しくありません。

〔誤譯〕 The difference of the spoken language and the written language of English is not so great as Japanese.

〔正譯〕 The difference *between* the spoken and the written language *in* English is not so great as *that in* Japanese.

〔解説〕

a. 「A と B との差」を云ふ時は〔正譯〕の如く
The difference *between* A and B.

とするか、又は

「之はそれと全く違ふ」。

This is quite *different from* that.

を應用して

○ The difference *of* A *from* B.
とすべきである。

b. 原文には「英語の」とあるも實は「英語に於ける」の意であるから “*in*” を用いた譯である。

○ c. “*Language*” を二度繰返すよりも前の方を一つ省いた方が品が好い。

〔類例〕

{ I prefer *the new* to *the old method*.
「僕は古い方法よりも新しい(方法の)方が好きだ」。

e. 「日本語程」と言へど實は「日本語に於ける文語と口語との差程」であるから、冗長をだに厭はずば更に前の句を繰返して “*as the difference between the spoken and the written language in Japanese*” とすべきを類を避けて “*that in Japanese*” としたのである(4 参照)。

(165) こんどの大運動會には君はどの競走をやるのか。八百ヤードか五百ヤードか。

〔誤譯〕 What race are you going to make in the next grand athletic meeting, the eight hundred-yards race or the five hundred-yards race?

〔正譯〕 What race are you going to *run* in the next grand athletic meeting, the eight hundred-*yard* race or the five hundred-*yard* race?

〔解説〕

○ a. 「競走をやる」の「やる」は “*run*” であつて “*make*” ではない。

b. 「八百ヤードの競走」などい前の「八百ヤード」なる文句が一圖を成つて後の “*race*” を形容せる文法上

所謂複合形容詞 (Compound Adjective) 中に在つてはその名詞は前の数詞の影響を受けて複数となることではない。

比較:-

I joined in the two hundred-yard race.
「僕は二百ヤードの競走に加はつた。」
It is two hundred yards from here to that pole.
「此處からあの柱の處まで二百ヤードある。」

This is an eight-day clock.
「之は八日捲の時計だ。」
He stayed there for eight days.
「彼はそこに八日間滞在した。」

- ◎ (166) 事茲に至つては最早一刻も猶豫はなりませぬ。早速あなたが行つて先方へ直接談判を開く方が宜しいです。

【誤譯】 As things have come to this pass, there is not a moment to be lost. You had better to go at once and open direct negotiation with the other party.

【正譯】 Now that things have come to this pass, there is not a moment to be lost.

You had better go at once and open direct negotiations with the other party.

【解説】

- a. 「事茲に至つては」は即ち「事茲に至つたからには」であつて、理由を述ぶると同時に時間關係を示して居る、かゝる場合には通例 "now that," "seeing that," "since" を用ふ。 (*had better + root*)
- b. 「……した方が宜い」と云ふ時 "had better" の形を用ふるとその次に來る Infinitive の "to" は常に之を省く。
- c. 「交渉談判」の意味の "negotiation" は通例複数にする。

【類例】

I have broken off negotiations with him.
「彼は交渉を断絶した(破談にした)。」

The negotiations were abortive.
「交渉は不調に終つた。」

- (167) 今日は熱いのも尤だ。土用の入りで寒暖計は日蔭で九十五度だもの。

【誤譯】 It is no wonder that it is hot to-day. It being the first day of *doyō*, the thermometer is 95° in shade.

大成中學校ノ又ハ中長イハ
ノモルヨ 労働ヲイフテハカラナ
府一先生カ

[正譯] It is no wonder that it *should be so* hot to-day. It being the first day of *doyō*, the thermometer *stands at 95°* in the shade.

[解説]

a. "It is no wonder that.....," "It is quite natural that.....," "It is proper that....." など云ふ文句に伴ふ句の中には "should" を用ふるが普通である。

[類例]

{ It is quite natural that he *should* have failed.
「彼が失敗したのは當然だ」。

b. 原文は唯だ「暑い」をなつて居れど寧ろ [正譯] の如く "so hot" 「こんなに暑い」をすることが適當であらう。

c. 「寒暖計は...度である」と云ふ時は通例 "The thermometer *stands at*....." 又は "The mercury (水銀) *stands at*....." 即ち「.....度の所に立つ」と謂ふ。

d. 「日蔭で」「日向で」「暗がり」「明るみで」「雨降りに」「寒い所に」など云ふ時は "in the shade," "in the sun (shine)," "in the dark," "in the light," "in the rain (or wet)," "in the cold" を常に "in the....." の形を用ふ。

(168) 職工は終日働いてやうやうに五十錢前後貰ふ。しかしその半圓は富豪の千金ほど彼にとつては貴いのだ。

[誤譯] Workmen earn about fifty *sen* with difficulty by working all day long. Yet that half *yen* is as precious to them as one thousand *yen* of wealthy people.

[正譯] Workmen earn about fifty *sen* with difficulty by working all day long. Yet that half *yen* is as precious to them as one thousand *yen* (is) to wealthy people.

[解説]

「富豪の千圓ほど」は實は「千圓が富豪に取つて(貴く)ある程」の意であるから [正譯] の如くすべきである。

(169) いつぞやの大雪で、人が二人凍え死んだ。一人は馬方で、も一人は樵夫であつた。

[誤譯] Two men were frozen and died in the great snow the other day; one was a driver of a pack-horse, and the other was a woodcutter.

〔正譯〕 Two men were frozen to death in the heavy snow the other day; one was a driver of a pack-horse, and the other (was) a woodcutter.

〔解説〕

a. 「凍え死んだ」「焼け死んだ」「餓死んだ」「壓死した」など云ふ時は結果を表す“to”を用ひ“to be frozen to death,” “to be burnt to death,” “to be starved to death,” “to be crushed to death” などするが普通である。

b. 「大雪」「大雨」「大霜」などには“a heavy (fall of) snow,” “a heavy (fall of) rain,” “a heavy (fall of) frost” と通例“heavy”を用ふ。

(170) その漂泊者は絶望のあまり地上に打倒れた、すると一人の通りがりの人が近よつてやさしく肩を叩いた。

〔誤譯〕 The wanderer fell down on the ground in despair. Then a passer-by came up and ~~and~~ patted his shoulder gently.

〔正譯〕 The wanderer threw himself down on the ground in despair. Then a passer-by came up and patted him gently on the shoulder.

〔解説〕

a. 此處の「打倒れた」は自ら「身を投じた」の心持で“threw himself down”とすべきである。

b. 「彼の肩を叩いた」を“patted him on the shoulder”とするに就ては 8. b. 参照。

(171) あの恐ろしき災難の報を聞くや否や私は友人の安否を電報で問合せた。

(東高商 41)

〔誤譯〕 No sooner I heard the news of that terrible disaster than I inquired with a telegram whether my friend was safe or not.

〔正譯〕 No sooner had I heard the news of that terrible disaster than I inquired by telegraph whether my friend was safe or not.

〔解説〕

a. “No sooner……than”の形を用ふる時はその動詞は常に Past Perfect とし且文中の主語と助動詞“had”の順序を顛倒す、但し等しく“no sooner……than”の形を用ふるも之を劈頭に出さず文の中に挿めばその順序は敢て之を變ずる必要は無い。

下の諸の形式を比較してその語の順序及び動詞の *Tense* の差に注意せよ：—

- 「その恐ろしき災難の報を聞くや否や……」。
- a. *No sooner had I heard the news of that terrible disaster than.....*
- b. *I had no sooner heard the news of that terrible disaster than.....*
- c. *Hardly (or Scarcely) had I heard the news of that terrible disaster when (or before).....*
- d. *I had hardly (or scarcely) heard the news of that terrible disaster when (or before).....*
- e. *As soon as I heard the news of that terrible disaster,.....*

み 「電報で」と云ふ時の「電報」には “*telegraph*” 「電信機」を、「で」には通信機關乃至手段の心持で “*by*” を用ふ。

〔類例〕

By letter 「手紙で」; *by word of mouth* 「傳言で」。

c. 最後の “*whether my friend was safe or not*” は “*about the safety of my friend*” と約むるも可 (50. 参照)。

(172) 不幸にも瀛車に乗りおくれましたので今朝漸く當地に着きました、試験が済ん

だら早速郷里に歸り海濱に行つて英語と數學とを出来る丈け勉強する積りです。

(高等 大正 3)

〔誤譯〕 *I missed the train unfortunately and I arrived at here this morning at length. As soon as the examination will be over, I shall return home and go to the sea-side, where I mean to study English and mathematics as hard as possible.*

〔正譯〕 *Unfortunately I missed the train and it was not until this morning that I arrived here. As soon as the examination is over, I shall return home and go to the sea-side, where I mean to study English and mathematics as hard as possible.*

〔解説〕

a. 本來から言ふと副詞なるものは既に *Adverb* と云ふ名が示せる如く動詞 (*Verb*) に副うて之を修飾するがその役目で、通例その修飾する動詞の後に置くこと云ふのが原則である。例へば

He rises early in the morning.

「彼は朝 早く 起きる」。

- けれども時としては副詞は單にその文中の動詞のみを修飾するに非ずして廣くその文全體を修飾することがある、そしてかかる場合はその位置を變じて常に之を文の劈頭に置く、例へば

比較：—

- | | |
|---|----------------------------|
| { | a. He did not die happily. |
| | 「彼は幸ひな死に方をしなかつた。」 |
| { | b. Happily he did not die. |
| | 「幸ひにも彼は死ななかつた。」 |

に於て、a. の方は通例の副詞の用法で “happily” は單に動詞 “die” に係り “die happily” 「幸ひな死に方をしなかつた」をその人の不幸な死に方をせることを示して居る、之に反し、b. の方は文の劈頭にあるから此の “happily” はそれより以下の文句全體に係り「彼が死ななかつたことは幸福である」即ち「幸ひにも彼は死ななかつた」をその人の死せざりしことを述べて居る。一語の位置の差能くかくその人の生死如何に關す、副詞の位置豈夫れ忽諸にすべけんやである。閑話休題、兎に角かう云ふ關係で此處は是非〔正譯〕の如く “unfortunately” は文首に置くべきである。

- b. 「今朝漸く着きました」の「漸く」は “at length” や “at last” では未だその真意が表されない。「今朝漸く着きました」は即ち「今朝になつて始めてやつて着きました」の意であるから〔正譯〕の如くするか又は “I could not arrive till this morning” (162. b. 参

照) までとするか、乃至は “I arrived only this morning” まですべきであらう。

c. 「當地に」の「に」は “here” の中に既に含まれて居るから “at here” は蛇足である。

d. 「試験が済んだら早速」は成程事は未來に關するも斯かる場合には猶ほ現在を以て未來に代用するを云ふのが文法の定則である (13. a. 参照)。

- (173) 昨日久し振りで上野の動物園へ行つて見たら種々の珍しい動物が居た。

(東高商 大正 4)

〔誤譯〕 Yesterday I went to the Zoological Garden of Ueno after being away for a long time and there were several curious animals there.

〔正譯〕 Yesterday I went to the Zoological Gardens at Ueno, where I had not been for a long time, and found several curious animals there.

〔解説〕

- a. 「何々園」と云ふ時の “garden” は概ね複數にする、“the Botanical Gardens” 「植物園」。
- b. “At Ueno” とするに就ては 77. a. 参照。